

910



# 國語

中  
第三学年用  
学校

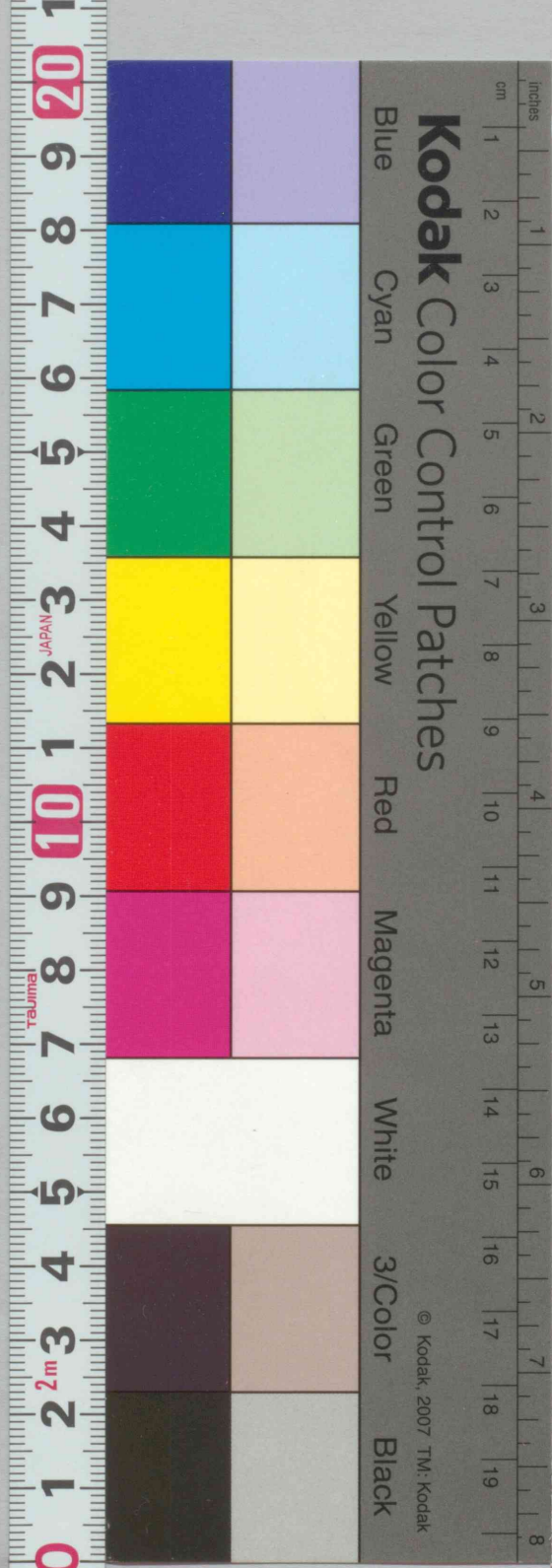
教育図書株式会社

教科書文庫  
6  
810  
45-1949  
0130449690

教育文化研究会編

文部省検定済教科書

684 類  
7 號



60360  
教科書文庫  
6  
810  
45-1949  
01304  
49690



昭和二十四年十月十日  
文部省検定済  
中学校國語科用

教科書文庫

6

810

45-1949

0130449690

中央図書館

# 國語

中  
第三学  
学  
年  
校  
用

教育図書株式会社

広島大学図書

0130449690



広島大学図書

0130449690



目次

一 春	耕	宮沢賢治
二 雲		
一、大地の夢	へ	七・四
二、空の感情	尾崎喜八	八・八
三 佐吉とひばり	中村草田男	四
四 リンカーン	矢内原忠雄	七
五 しょうがくぼ	北原白秋	三
六 渡りの起原	内田清之助	四
七 ことばの楽しみ		
一、小さなことば	島崎藤村	究
二、國語の成長	柳田國男	美

一春 耕

宮沢賢治

本課は、長い冬が終つて、ようやく迎えた春の喜びの中に耕す心を歌つた詩である。東北地方の風土と、作者の個性とに注意して味わおう。  
宮沢賢治は、明治二十九年（一八九六）岩手縣で生まれ、昭和八年（一九三三）に没した。農民の指導に一生をささげる一方、詩・童話・短歌・脚本などを創作し、すぐれた作品を多く残している。作品には、詩集「春と修羅」、童話に「どんぐりと山ねこ」「注文の多い料理店」。「風の又三郎」、その他「農民藝術論」などがあつて、「宮沢賢治全集」に收められている。

一

日が照って鳥が鳴き、  
あちこちのならの林も  
けむるとき、  
ぎら／＼と鳴るきたない手も  
おれはこれから持つことになる。



二

南から、  
また東から、  
ぬるんだ風が吹いてきて、  
くるおしく春をはらんだ黒雲が  
いくつもの野ばらのやぶをわたってゆく。

ひばりと川と、  
台地の上には  
いっばいに種苗を積んだ汽車の音。

しごと着はやぶけ、  
いろ／＼な構図は消えたけれども、  
ことしはおれは  
ちょうど去年の二倍はたしかにはたらけ  
る。



からひのき  
まつ科の常  
緑喬木。

三

いまはねかえるつちくれのかけ、  
古びて緑の陶器のかえる。  
そのかえる またはねかえり、  
次のつちくれ はねかえり、  
まだねむっている春のかえるだ。  
うごかないのは陶器のため、  
次のつちくれ いまかいり、  
かえるよ、  
こんどは四、五日かゝって、  
からひのきをこゝに植えるのだ。

四

野ばらのやぶを、  
ようやくとってしまったときは、  
日がこう／＼と照っていて、  
そらはがらんと暗かった。  
おれも太市も忠作も、



一秒九トンの針  
こゝでは、  
北上川の水  
流。

そのまゝさゝにおちこんで、  
ぐうぐうぐうぐうねむりたかった。

川が一秒九トンの針を流していて、  
さががたくさん東へ飛んだ。

〔宮沢賢治全集〕による

【学習の手引】

- (1) これらの詩に表われた東北の春の風土について調べる。
- (2) 作者がどういう態度で農耕や開墾に従事しているかについて考える。
- (3) 一年で学んだ同じ作者の「雨にもまけず」を読み返して、その精神がこれらの詩のどこにどのように表われているかについて話しあう。
- (4) これらの詩の心持がしぜんに表われるように朗読をくふうする。
- (5) 勤勞の喜びを主題にした詩を作ってみる。
- (6) 同じ作者の他の作品をできるだけ多く読む。

二 雲

本課は雲に関係のある二つの文を収めた。

一、大地の夢

ヘルマン・ヘッセ (Hermann Hesse) は、一八七七年ドイツのシュワールベンで生まれた。詩人。小説家。

作品には、名高い「ペーター・カールメンチント」をはじめ、小説・詩・隨筆などたくさんある。一九四六年にノーベル賞を受けた。本課は「ペーター・カールメンチント」の一節である。

山と湖と暴風と太陽とが私の友人だった。彼らは私に話して聞かせ、私を育て、長い間、ある人間や人間の運命よりも、私に好ましく親しかった。しかし輝く湖や、わびしい銀松や、日の当たっている岩にもまさる私の寵兒は雲だった。

廣い世界に、私以上に雲を知り、雲を愛する者があつたら教えてもらいたい。世界に雲より美しいものがあつたら見せてもらいたい。雲は浮遊であり、目の慰めであり、雲は祝福であり、神のたまものである。雲は激昂であり、死の力である。雲はみどりごの魂のようにかよわく柔らかく平和であり、優しい天使のように美しく豊かで恵み深く、死の使者のように暗くのがれがたく容赦がない。雲は薄い層をなして銀色に漂い、金色にくまどられてにこやかに白帆のごとく走り、黄・赤・薄青色にいろどられて、静かにやすらう。雲は陰氣に静かにしのび寄り、狂亂の騎手のように風を切って、まっしぐらに駆け、ふさいだ隠者のようにわびしくほのかに青空にかゝる。雲は幸福の島の形をし、祝福する天使の姿をし、おどす手のごとく、はためく帆のごとく、旅行くつるのようだ。

雲は神のみ空と哀れな大地との間に、両界に属しながら、人間のあらゆるあこがれの美しいたとえのように、汚れた魂を清浄な空にまつわりつける大地の夢のように浮かぶ。雲はあらゆる流浪と、あらゆる探究と欲求と郷愁との永遠の象徴だ。そして雲が天地の間に、ひかえめにあこがれながら強情にかゝっているように、人間の魂もまた現在と永遠との間に、ひかえめにあこがれながら強情にかゝ

ついでに。  
お、雲、美しく休みなきものよ。私はまだ無知な子どもだった。そして雲を愛し、雲を見ていた。そして私もまた雲のようにさまよいながら、どこにもなじまず、現代と永遠との間に漂いつゝ、人生をわたってゆくであろうということを知らなかった。

幼年のころから、雲は私の愛する友たちであり、また兄弟だった。私が通りを横ぎると、もう私たちは互にうなずきあい、あいさつし、一瞬間目と目を見あわせていた。私はまた、そのころ私が彼らから学んだものを忘れない——その形と色と去來と動きと、その輪舞と舞踊と休息と、またそのたえなる地上的な物語とを。

雪姫の物語  
ロシアの傳説。

特に雪姫の物語がそれである。舞台は中くらいの山で、初冬の、下吹く風の暖かいころ。雪姫は少しばかりの従者を連れ、高い空から降りて来て山の廣いくぼ地か、あるいは廣い山頂に休み場所をさがす。たちの悪い北東の風が、無邪氣な姫のいこいをねたましそうにながめて、ひそかに舌なめずりをしながら山を吹き上がり、急に狂暴に彼女を襲う。そして美しい姫に黒いちぎれ雲を投げかけ、姫をあざけりの、しつて追いたてようとする。しばらく姫はおちつかないが、じっと待ちこらえて、ときにくんそうに頭を振りながら、あざけるようにひそかに元の空に舞いもどり、ときにまた急に、おびえている供の女たちを身のまわりに集めて、まばゆいばかりに威のある顔を現わし、ひややかに手を上げて怪物の風に退去を命じる。風はためらい、ほえながら逃げる。姫は静かに身を横たえ、そのいこいの席を蒼茫たるまわりの霧の中に包む。そして霧がはれると、くぼ地も山頂も煌々として晴れやかに、清淨な柔らかな初雪におゝわれているというのである。

この物語の中には、何か崇高なもの、美の魂と凱歌のようなものがあって、それが私をうっとりさせ、私の童心を楽しい祕密のように感動させた。

まもなく私が雲に近づき、雲の中へはいり、その群がる多くを上の方から見ることでできるときがきた。私がゼンアルプ岳とよばれる第一の峰に登ったのは十歳のときだった。私たちのニミコン村はそのふもとにあったのである。そのときはじめて、私は山の恐ろしさと美しさを見た。氷と雪水とがあふれている深く切り込まれた幾多の峽谷、緑ガラスのような氷河、恐ろしい堆石、そしてこれらすべての上につり鐘のように丸く高い青空。十年の間、山と湖の間にはさまれて暮らし、群ら立つ近い山々に窮屈にまわりをとり囲まれてきたものには、はじめて自分の上に大きなひろくとした青空がひろがり、自分の前に果てしない地平線が開けた日は忘れられない。登りながらも私は、下の方からながめ慣れていた懸崖や絶壁が圧倒的に巨大なのを見て驚いたのであった。私はまったく瞬間にうち負かされ、不安におびえ、歓呼しながら、急におそろしく廣大なけしきが私に迫ってくるのを見た。それでは世界はこんなにとつともなく大きかったのか。はるか下方にかすかに見えている私たちの村は、わずかに小さい明かるい斑点にすぎない。そして下の谷からながめて、くつつき合っているように見えた峰は、お互に数里も離れている。

そのとき私は、これまでまだ自分が世界をやっと細目で見ていただけで、少しもすっかり見ていたのではなかったということや、私たちのへんびな村へは杳として消息が聞えないでも、この外では山が立ち、山がくずれ、大事件が起っているのだということ、おぼろげながら感じ始めた。と同時に私の心の中には、羅針盤の針のように、そのおそろしくはるかなる方へ無意識に向かおうとして、

ひどく震えるものがあつた。そして今、どういふ無限の遠くへ雲が旅するかがわかつたので、はじめて私に雲の美と憂鬱とがすっかりわかつた。  
〔青春彷徨〕 關泰祐の訳による

二、空の感情

尾崎喜八

尾崎喜八は、明治二十五年（一八九二）東京で生まれた。詩人。著書には、「高層雲の下」・「高原詩抄」・

「行人」などのほか、「詩人の風土」・「山の絵本」・「雲」・「ジャベル」などの隨筆・紀行・翻譯がある。

ラマルク  
（七四一—一八三二）  
フランスの自然科学者。博物学者。  
リコーク  
ハワード  
年代未詳。  
イギリスの自然科学者。  
ラスキン  
（一八一九—一九〇〇）  
イギリスの評論家。

イギリスの氣象学者で、有名な雲の研究家ケイヴは、彼の著書の一つの中で、人類が雲の美を発見したのはあまり遠い昔のことではなく、おそらく十八世紀の末か十九世紀の初めのころだろうという意味のことを言っている。彼はたぶんラマルクやリコークハワード、あるいはラスキンの時代を念頭においているのである。しかし文字というものがなく、あつても今日のようにゆきわたらず、たとえ書いても印刷に付せられることにはなほだまれであつた昔には、よしや雲に人一倍傾倒し、その美に人一倍感じやすい人間があつたとしても、その記録なり感動なりを書き残してひろく後世にまで傳えるすべはなかつたはずである。私はむしろこう考えたい。人類は遠い昔から雲の美しさに氣がつき、雲に注意し、それを大空に浮かぶ靈妙なもの、天來の使信、達し難くはるかにして心を魅するもの、また、ときに怪異にして恐るべきものと観じていたであらうと。そして雲に対する幾百世代のこのあこがれや関心が、積もり積もつて後世の藝術ともなれば学問ともなつたのであると。嘆美や驚異から「眞」の探求——「眞」の探求からいよ／＼豊かな美の再発見へ。人類のたどつた道程は、

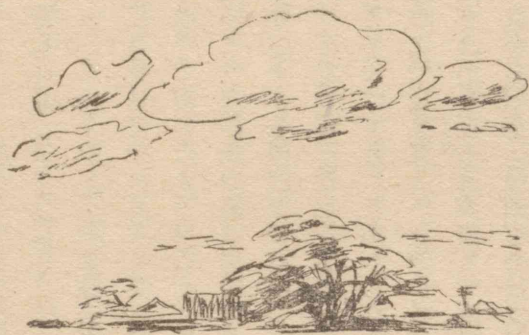
また、人間個人のしぜんな道程でもあるのではないだろうか。それでケイヴの意味するところがもしもこの再発見にあるのなら、私はあえて異を唱える者ではない。

思い出すことのできるかぎり遠い少年時代から私は雲を愛した。雲は私にとって、見しらぬ遠い世界へのいざないであり、空想そのものの姿であつた。子どものころ

から、ものにあこがれる心が強く、夢見がちに生きることの多かつた私にとって、幼年の日の青空に浮かんで消えた雲の姿こそ、孤独の魂を優しくゆする最初の歌声でもあれば物語でもあつた。

だれひとりとして少年の私に雲をさして見せたり、雲のことを話して聞かせてくれたりする者はいなかつた。そのくせ明治三十年ごろの、東京隅田川の川口近くにあつた私の家からは、きょうよりもっときれいな、ひろ／＼とした空に、雲は毎日出ていたのである。庭や河岸ぶちの植物などについても同じことだつた。だれもそれらに対して私の幼い目を開いてくれはしなかつたし、また、知的にも審美的にも、そうした力を持つ者は周囲にひとりもいなかった。父も母も、雇人たちも、皆忙しくその日その日を働くのみ

で、人しれず柔らかに伸びつゝある幼い魂、ことに自然に対して早くも見開かれた好奇の目のことなどは考えもしなかつた。四十年後の今日、たま／＼昔の家のほつりを過ぎながら、今もなお東京湾の空に浮かぶ積雲をながめ、河岸の石垣の間に咲くはずなやたんばばを見いだしながら、私は深い感慨



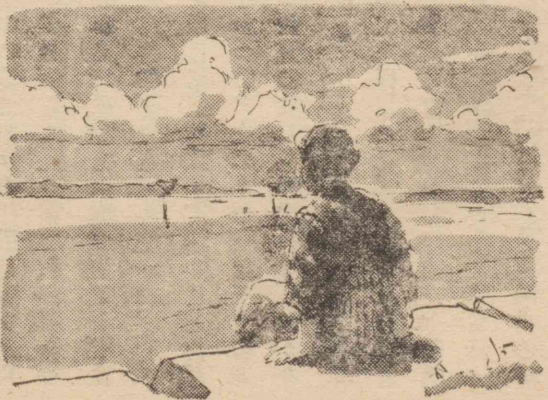
たすな  
別名べんべ  
ん草。高さ  
三十センチ  
くらい。春  
夏には十字  
型の白い花  
を咲かせ  
る。春の七  
草の一種。



にうたれるのである。

しかし今日おとなから雲について教えられる子どもたちと、自分でそれを発見し、自分から親しみなげだ昔の私のような子どもと、けっきょくいづれが幸福であるかは、にわかにはこれを言うことはむずかしい。私としては、しかし、氣質や傾向の導くまゝにまず実物に親しみ、やがてよい指導者や書物について学びながら、自分で深くはいつていくのを、最も順当な道だと思っている。もっとも私自身はついに單なる雲の愛好者にとゞまってはいるけれども。

はげで掃いたようなのや、鳥の羽のような薄い雲よりも、山や群鳥のような厚味のある雲の方が、すなわち今のことばで言えば巻雲型の雲よりも積雲型の雲の方が、子どもとしての私の心をひいたようである。否、むしろ雲といえは、春夏の空へむく／＼上がる積雲のことだけであつたかもしれない。私はその雲を見るために、よく埋めたて後まもないそのころの月島へ行つたものである。鉄砲州のはずれから佃の五厘渡しで隅田川を横断すると対岸は佃島。弁天様の横から磯臭い漁師町を抜けて、右へ橋を渡れば貝のかけらのさらさら光る月島の埋立地。一株の家もない平坦な廣い飛行場のような島には雑草がぼう／＼とはえて、その盡きる所は一望の東京湾の水だつた。今の月島六丁目と東河岸通りの所で島はまったく終つて、そこに波の打ち寄せる石垣があつた。遠浅の海には、沖へ／＼とみおつくしが並び、その向こうに、近



月島  
鉄砲州  
佃島  
いすれも東  
京都中央区  
にある。

みおつくし  
水深を標示  
したく。

房総  
千葉縣一帯  
をいう。

洲崎  
東京都江東  
区にある。

寒水石  
茨城縣日立  
市附近で産  
する白色小  
つぶの大理  
石の一種。

クラーク  
二八〇八七  
アメリカの  
天文学者。  
望遠鏡の製  
造家として  
名高い。

藤原博士  
二八四  
藤原咲平の  
こと。風お  
よび雲の研  
究家として  
名高い。

くはお台場から、遠くは房総の山々までが一目にながめられた。春ならば、鳥のところどころにクロイグアが咲き、いつでも二、三羽のひばりがさえずっていた。そして夏はばつたの世界で、私は竹棒の一端をめぐるへ差し込んで、それでとのさまばつたやぐるまばつたを伏せて取つた。

石垣の縁から両足をぶら下げて、青のりや、かにや船虫なんぞのにおいのする潮風に吹かれながら、水平線の上に並んでいる雲を飽かずながめた遠い昔を思い出せばなつかしい。窮屈なわが家と都会の人生とは後の方、石川島造船所の鉄板をたたく音と、川口の空に林立する幾百という船のマストのかなたにあつた。こゝでは、ものおとといえは、石垣にびちゃびちゃ当たる波の響と、草の葉をそよがせる風の音だけだつた。目にはいるものといえは頭の上の大きな空、右手のお台場と左手の洲崎の鼻とにくざられて遠くひろがった東京湾の水。そうしてその水と空との向こうに、日に照り輝く雪の連山のような、寒水石のかたまりのような積雲の群れ。ちょうどドイツの詩人たちの永遠のあこがれであるギリシアやイタリヤの空のように、それはおとなばかりの世界に生きていた私の魂にとつてのたゞ一つの救い、たつた一つの解放の世界だつた。それがいつでも私を呼んだ。

こうして雲が、また、自然が、その後の私の生活の伴侶ともなれば藝術の契機ともなつた。植物や小動物に親しむと同時に、私はたえず雲に注意し、雲をながめ、独学でいる／＼雲のことを学ぶとともに、ますます深く雲の美にひかれるようになった。あやしげな語学の力でラスキンの「近代画家論」の雲の部分けんめいに読んだ。ある日クラークの「雲」を手に入れたときには文字どおりに狂喜した。三宅武雄という人の「雲の見方」という小さい本を見つけたときには、日本にもこんな雲好きがいるのかと思つてうれしかつた。それからとう／＼藤原博士のあのすばらしい「雲」が出た。こ

れこそ私にとっては決定的な啓示だった。それ以来私は雲と天氣変化との関係に注意をはじめ、雲を撮影し、記録し、同時に本来の詩業のかたわら、ひとりてこつ／＼と氣象学を勉強したり、妻や娘にてつだわせて、道具は不完全ながら欠測のないように、毎日三回の定時観測を続けたりした。

表で遊んでいた娘が、「おとうちゃん、きれいな高積雲が出ていますわよ。」と駆け込んで教えに來たのは、彼女がようやく七歳のときだった。今、私と散歩の道で、同じ高積雲の落下縞しほについて私から教えられるのは、十八歳になった彼女である。幾とせの間、毎晩ラジオで全國天氣概況や漁業氣象を速記することに熟練した妻は、日ごとの雲形や、雲の來る方角や、地上の風向きなどから天氣を予測することができるようになった。

こうして私の熱情は彼らにもなにかを興えた。そのなにかに加うるにいくらかの氣象学関係の藏書。それだけが貧しい私から彼らへの遺産であつてもいい。もしもその心にして謙虚であるならば、たとえそれだけをもつてしても、なおかつ彼らはそこから無限の喜びをくみうるはずだからである。

雲を観察することが「氣象学をする」ことでないのはもちろんである。今日でも往々ことさらめいてそのようなだめをおす学者があるが、しかし、もしもわれ／＼専門外の徒が他に職能を持ち、その職域に精励しながら、なおかつ、わずかばかりの暇をさいて雲をながめ、雲の美に入り込み、雲のことばを聞くことに、生きる日のもう一つの喜びなり全きがいなりを感じるものとすれば、それはとりもなおさず、われ／＼が雲の美のなんたるかを解し、藝術、花鳥のほかにかくも心を動かすもののあることを知り、天空に表われるその四季、日夜の不可思議に胸をうたれるからである。そして雲のごと

き天涯がいびょう漂渺ひょうびょうのものに対していただくこのような日ごととに新たな感動や驚異の情こそ、われ／＼日本人が遠い祖先から受け継ぎ、はぐくんできた民族の心情の一部なのである。そしてこの感動、この驚異の情をだれはぐからず伸び／＼と生かして、そこからなんらかの啓示、なんらかの力を見いだそうとする態度こそ、今日のわれ／＼の「雲の觀察」が單なる道樂、單なる暇つぶしでないのだという断乎たる立言を生むのである。

雲は見られなくてはならない。幾重いくえにもながめられなくてはならない。もしもわれ／＼幾千万人の素朴ぼくな目が大空の彼らを見てやらずに、これを専門の人々に任せて顧みないとしたならば、あの天の種族が泣くだろう。嘆きのしづくを落すだろう。

雲は知られなくてはならない。知ろうとされなくてはならない。それは空の感情の表現であり、靈妙にして千変万化すること、あたかも人間の心緒の消息のごときものだからである。

そして彼らの美を探り、その感情のよつて來たるところとゆくところとを察することは、われ／＼の情操を高め、われ／＼の内面生活を豊かならしめる一つの道である。〔雲〕による

## 【学習の手引】

- (1) この東西のふたりの詩人が、雲にどんな美しさを見いだしているかについて話しあう。
- (2) 二つの文の大意を発表してみる。
- (3) 少年の日のなつかしさが表われているところを抜き出してみる。
- (4) ふたりの作者は雲を観察することによって何を得ているか、互に考えを発表しあう。
- (5) 「雲」または「星」という題で、少年時代の思い出の文や詩を作ってみる。

## 三 佐吉とひばり

中村 草田 男

本課はかおりの高い童話である。こゝにたゞえられた人生観を読みとろう。  
 中村草田男、本名は清一郎。明治三十四年（一九〇二）中國のアモイで生まれた。愛媛縣の人。俳人。著  
 書には、句集に「火の鳥」・「万緑」・「來し方行方」、研究に「蕪村」などがある。



ひとりでたくさんのよび名——というよりあだ名を持っているあんまさんがありました。本名は佐吉というのですが、本人とさし向かいの場合以外は、他のいろんな名の方が呼びならわされていきました。その中でも、いちばんふつうなのは、「馬の足さん」というのです。あんまさんの名が「馬の足さん」では、いちおう、はなはだ不調和ですが、何がもとでそう言いだされたのか、今ではよくはわかりません。佐吉は、正しすぎるくらいに輪廓の正しい、いわゆるうりざね顔をしていて、嚴密な年齢は本人以外だれも承知してはいませんが、いつも若々しくて、とにかく、こじんまりとした美しいあんまさんであるには相違ありません。しかし、どこにも役者に似かよったような点はなく、それがこのあだ名の原因だとは思えません。山へ三里、海へ一里のさゝやかな平野の中に孤立した町、それに接した農村の身うちの、ある農家——佐吉がどこからともなく、そこ

をたよってやって来たのは、十五年ほど以前のことでした。そのとき既に両眼は盲いておりましたが、彼はそのまゝ、その家の門内の別棟に住みつくことになったのです。わら屋根のたった一間で、かわやと水洗い場が別に附属しています。この別棟は、がんらい、うまやであって、馬がいたこともあつたのを、佐吉を入れるためにとりあえず改造したとかで、佐吉のことをしばらくは「馬の跡」と唱えていたのが、いつのまにかなまって、現在の「馬の足」になったのだと説明する村の老人株の人もおります。しかしこの説に対しては小首をかしげて笑う人の方が多いのです。なぜならば——佐吉のあんまさんとしての暮らしの実際の姿をながめてみると、もっと手早く、このあだ名のゆえんが納得されるように思えたからです。佐吉は仕事に出かける際には一本の寒竹のつえを突きました。それだけならば、あんまさんとしてなんにも珍しくはありませんが、佐吉に限ってそのつえを正反対に向けて突いたので、細長い方を握って、太い節の多い方を土地の面に当てました。ところが、最後の節のところは空洞になっていたために、歩むと一突きごとに、ポカッ、ポカッという一種おもしろい音が伴なうことになりました。その音が馬蹄の音と似かよっていたので、「馬の足」のあだ名の起りも実はそこからだと、今の村人の大部分は信じているのでした。夜ふけなど、そのつえによる馬蹄の音は、かなり遠方へまではっきりと傳わってくる場合があります。そんなときには、「あゝ、馬の足さんが仕事で済んで寝に帰って行く。」そう言っ、人々は顔を見あわせて笑いました。ふつうのようすに突いたらどんなものかね——と、まれに忠告する人があつても、ふだん諸事すなおな佐吉が、そのありだけは妙に頑固になって、「いゝえ、この方が安定がとれて安心がゆくし、便利なのです。」と耳をかそうともしないのです。佛さまのようにすなおだが、またどこかにおれたらにはがてんのゆかな

い、捕らえどころのないところがある。——つまり変わり者というのが定評でした。彼にあだ名の多いのも、そんなところから生じた現象だと思われれます。佐吉がつえを反対に向けて突くのは、けっしていわゆるつむじ曲がりや氣どりからではなくて、たゞひとり道を歩んでいるときでも、いつも身辺にボカッ、ボカッ、という朗らかな柔らかな響を耳にしていることによつて、心が紛らわされたからにすぎません。しかし、めくらでない村人たちには、それと推測のつこうはずはなく、佐吉もまた、あえて説明しようとはしませんでした。

熊谷

熊谷直実(二)

二四一—三〇八

敦盛

平・敦盛(二)

二六九—二八四

これも役者じみたあだ名ですが、「馬の足さん」に続いて、よく使われるものに、「熊谷さん」と「敦盛さん」というのがありました。たゞ、こちらの方は佐吉の特別な場合の特別な動作のうえにかぶせられたあだ名でした。佐吉は世間でいう「聞きじょうず」の部類に属していました。彼は呼ばれて行ったおとくいの家の、どんな場所でも、また相手がどんな動作をしようとも、いつもたゞもの静かに寄り添って仕事をしました。話しかけられなければ彼の方から口をきろうとはしません。それでいて、その沈黙がだれにも少しも荷やつかいにならないのです。佐吉は座に着いたその瞬間から、自由にその家の空気に溶け入ってゆく天性——というよりも、溶け入ってゆく心とする心がけを備えていたというわけです。それでその家の人々は、喜びなら喜び、悲しみなら悲しみ、その場合の事情と氣分のまゝに、いろ／＼な身のうえ話や考えを、ひとりごとを言うようなしせんさで佐吉に語つて聞かそうという氣持になるのでした。佐吉は、たゞ話の切れめごとに、あいづちをうつだけですが、その声音がしんから話の内容に引き込まれていることを表わして、人々は更にあとを話し続

けずにはいられなくなつてくるのです。話し主は、たいていの場合、肩を佐吉にもませている当人なのですが、話の内容がしだいに朗らかな楽しさをましてくると、佐吉は思わず仕事の手をちよつとやめて、顔をそばへ向け、半ば中空を仰ぐようなかっこうをして、片ひじを高く上げたてのひらで口元をおゝい、声をたてないでひとりで笑う癖がありました。それをそばから見ている人たちが、「そら、熊谷さんが始まった。」と言つては興がるのでした。舞台の上で演じられる熊谷のある場合のかっこうに似ているというのです。話の内容がしみ／＼と悲しいものになつてくると、佐吉は、いつのまにかうつ向いて、指先で左右の目がしらを静かに押さえます。そのときには、そばの人たちは「そら、敦盛さんが始まった。」と、さゝやきあうのですが、それでいて、なんとなく自分たちの心が慰められるのを覚えました。熱心な聞き手である佐吉は、その熱心さの度あいに匹敵するめいりょうさで、他人事ながらも、聞いた話の内容をいつまでも記憶しておりました。一度佐吉に語つて聞かせた話とあれば、かんじんの語つた本人が忘れてしまつていゝところになつても、必要に應じて佐吉から、逐一もう一度引き出してみることさえできたのです。それで「たいせつな事柄があつたら、なんでも一度だけ馬の足さんに話して、馬の足さんの中へしまつておいてもらうがよい。」などという冗談さえ、聞かれるほどでした。それだけに、語り手が後目になつてから、好悪の念とか、心境とかの変化に基づいて、同一の話題を以前とはまるで違つたゆがめた形や、色あいで話したようなことになつてくると、佐吉の心はひたすらに不安に動揺し、当惑してしまふのでした。彼は思わず中腰になり、ふだんの彼ならばありえないことですが、低い声なりに自分の方から人の話をおさえてかゝるのです。「でも、失礼ですがあなたは以前にはけつしてそうはおつしやらなかつたじゃありませんか。」そして、佐吉の

記憶の中から、はっきりとした以前の談話内容が証明として取り出されて示されると、だれでも閉口せずにはいられません。馬の足さんには良心の証券まであずけておかなければならぬからまいるよ。」

しかし佐吉は、またすぐに、がむしゃらなことを行つたあとの自責の表情を、めくらながらその面にかへて、もどかしそうに、こんなことをつぶやくのでした。

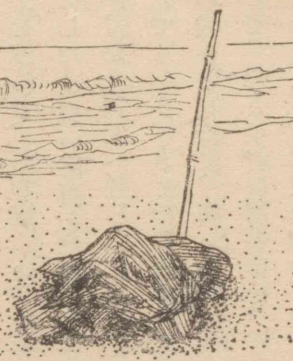
「ひとりひとりの方の、うち割つたお話を聞いてみると、そこ／＼に、どういふ魂がいて、どういふ暮らしをしていられるかがわかつて、私のぐるりが、手でさわるほどにはっきりとしたもので詰まつた世界になってきます。ところが、その魂が急にまるで別の魂であるかのようなお話ぶりをされる、……すべてのものが、もう一度、ぼんやりとしたものになって消え去つて、私は何をたよりにしていいかわからなくなります。」

佐吉の一間の棟と向かいあつた母屋——そこに住んでいる人たちも、いつしか、老人がなくなつて代が変わつたので、今では、身うちであるといつても、佐吉の身元や前半生については詳しいことをだれも知りません。母屋の人たちはなぜか、彼にしごく冷淡でした。彼の仕事も、こゝは農村なので、平生のおとくいは病人、そうでない場合は農閑期の骨休めにかぎられていました。仕事のないときの夜分など、佐吉は点字の書物を指がしらで読んだり、天性の器用さで、人々に頼まれた簡単な小さな細工物を手探りで造つたりして、時間をすごしておりました。しかし、彼にとつての暇の多い春から秋にかけての、天氣のよい日中には、氣の向く方向へ出歩いて、戸外で一日を送ることも多かつたのです。もつとありのまゝに言へば——彼は、春は、ひとりでひばりの声に聞き入り、夏はひとりで潮を浴びることを何よりも楽しみとしていました。ひばりのあの絶えまなく震える朝らかな声に聞き入っていると、自分だけのいつもの暗い重苦しい時間と違つた、外の世界のすべてのものうえに明かるく流れる豊かな時間の中に浸りされたような喜びがわいてくるのでした。彼は村から少し離れた所にある砂がちの丘の上の、古いはぜの木根すそによく腰をおろして、つえと両すねを抱き、いつまでもひばりの声を享樂しておりました。そういう彼の姿を見かけたときには、村の人たちは、もう一つ別の、彼のあだ名、「俊寛さん」を持ちだしてきて、おかしがりしました。佐吉がそんな場合、さまつて、うれしそうに両足をしきりとさすり合わせていたからです。炎天に一里余りの道に足とつえを運んで、ある寂しい海岸でひとり潮を浴びたのも、ひばりの場合と共通の要求に促されたことでした。広い海面と無限のあなたにある水平線の姿とは、もちろん、ともに佐吉には無関係でしたが、たゞ胸元へ押しかぶさつてくる潮そのものの触感は、外の世界を形造っている、なにか基本物資とでもいふべきものの豊かな容積の中に自分もまた身を浸しきつたような感銘であつて、ひばりの声の場合と同様に、広い全体に連なりえたというような喜びがあふれてくるのでした。佐吉は泳げないので、岸と平行に潮の中を、ゆっくり左右へ歩いていただけですが、たま／＼その姿を見かけたとき、村の人たちは、芝居の書き割りの波の間を熊谷や敷盛がそうしている場合に似ているととりさたして、これをもまたおかしがりしました。あるときには、こんな事が起りました。晴天なりに既に土用波になつていたので、佐吉はしたゝか波頭に巻き込まれて顛倒しました。ろうばいした彼は、方向の勘を失つたまゝに水から脱け出そうと夢中に走つたので、とんでもない遠方のなぎさへ上がつてしまひ

書き割り  
舞台の背  
景。

三 佐吉とひばり

ました。着物を脱いだ場所に、例のつえが突き立ててあったのですが、廣い砂原を佐吉は縦横無盡に手探りしながらはいまわりましたが、いつまでもたどり着くことができませんでした。そのようすを村の人が見かけて、いちおう氣の毒がかりながらも、それだけにひどくこっけいなのに興がって、いつまでも傍觀し続けておりました。ついに自らつえに手を触れることができたとき——佐吉は、それをたゞ高くさく上げて、せわしくなで続けながら、二度も三度も踊り上がったそうです。着物などは問題ではなかったのです。「盲亀の浮木」、そのおりの光景を後に思い出しては、その人がそう形容して高笑いしたとき、村の大部分の人たちにはどういふ意味だかよくわかりませんでした。傳え聞いた佐吉は、ひじょうにまじめな顔つきをして、深くうなずきました。



盲亀の浮木  
めくらの大木を  
めくらが海を  
浮かぶ木を  
探り当てるが  
出会うことが  
の容易なこと  
のこと。

あるよく晴れた春の日の午後——佐吉は、久しぶりで、例の丘のはぜの木の上に腰を落して、絶えまなく続くひばりの声に聞き入っておりました。もう今の佐吉には、ひばりの声が傳える、果てしない過去から果てしない未來へ流れる時の流れの感銘は、かえっていかにも堪えがたいほどの寂寥りようでした。その佐吉の存在に氣がつかなくなつたのでしよう、彼の足元の方に、とつぜんお、ぜいの子どもこどもの声が現われて、氣ぜわしく何かをしゃべり始めました。聞くほどもなく、——この子どもたちが、いったんひばりの巢から子ひばりをうまく盗み出したものの、狂氣のように親鳥がすぐ追いつけて来て、投げつけた石に両眼がつぶれな

ゆすら  
ゆすら  
ゆすら

がらもひじょうに鳴きたてて、飛びかゝって来る氣味悪さに、子ひばりを土地の上に投げうって、やごとこまで逃げて来た——ということがわかりました。佐吉はすぐさま立ち上がりました。子どもたちはそのようすをどう解したのかたちまち逃げ散りましたが、佐吉は、土地の上に耳を近く寄せるようにしながら、ひたすらに親鳥の声をすのすの探り続けてゆきました。彼は自分の前半生を人に語って聞かせたことはありませんが、両眼の明を失ってしまった際の痛ましい記憶が今なま／＼とよみがえってきたのです。もう死んでしまっていた三羽のひな鳥と傷ついた親鳥とをふところにして家へ帰って来た佐吉は、ひな鳥たちをゆすらの木の根元へうずめ、親鳥を母屋から借りてきたひばりかごの中へ保護するために入れてやりました。人間を介抱するように手をかけてやった結果、親鳥の目はもう二度とあきませんでした。傷だけは数日の後にいちおう癒いえることになりました。それから更に幾日かたった夜中のこと——かたわらのかごの中で鳴き続けるひばりの声が、ふとことばになつて、静かにすわっていた佐吉の耳へ傳わってき始めました。彼は以前に、幽霊を目の前に見た人の經驗を聞いたことがあります。その人は薬問屋いすまの主人であつて、氣をおちつけて見れば幽霊をとおしてたくさんの小ひきだしにはある薬名の字までいち／＼読みとれるのに、とにかく、幽霊の姿はくつきりとそこにすわっていたというのです。佐吉の場合にも——ひばりがひばりの声でかすかにチイチイと鳴いているのが聞えていながら、同時に話すことばもまたはつきりと聞えてきたのです。

「私は、めくらです。」  
「いや私もめくらなのだ。」  
ひばりと佐吉との問答は、そこから始まりました。ひばりは話し続けました。

「私にはもう子どもたちを育てる義務はなくなりました。私自身を捜す能力も失ってしまいました。あなたが手をかけてくださるので生き続けてゆくことができます。生き続けてゆく以上、ひばりにはひばりの果たさなければならぬ仕事があります。どうか、毎日とは望めなくとも、晴れた日には、できるだけしばしば朝から夕方まで、私を野にお放してください。そして夜はこの屋根の下へまた、お連れ帰りください。」

「えさを捜すのでなくて、いったいどんな仕事がおまえにあるのだ。」

と佐吉が尋ねました。ひばりが答えました。

「いったん天上へ上がった人間の魂の中の、もう一度以前のところへ帰って来なくなったものを、私たちひばりが肩に乗せてこの地上へまで運ぶのです。いっさい私たちの目には見えませんが、虚空から長い綱のようなものがたれてきていて、その端のぶらんこのようになった所に、天の使が腰をかけています。天の使はそのひらの上に——これも私たちには見えませんが——小さな姿になった魂をたくさん載せています。地上のかなり高い所まで人間界の汚れが濃く立ちこめているので、天の使はそこまで来れば、もう下へは降りません。私たちは飛びたつときからあいつをします。そして、大気が清くすがすがしい、こゝらと思われる高さのあたりまで達したとき、目あてもなしに左右へ飛び流れながら更にあいつの鳴き声を続けます。すると天の使が——来い、来い、来い、来い——と（その声は私たちにはっきり聞えます）と、その所在を悟らすように呼びかけてくれます。断っておきますが、天國から降りてくる人間の魂はめくらなのです。それでいよく天の使がそのひらの上から、魂を私たちの肩の上に移す間も、魂がすべり落ちたりするそこのないやうにと、私たちは胸を

前に、身を縦にして飛びとゞまりながらも、魂に私たちの所在がはっきりするやうにと鳴き続けておられます。私たちの頭の後には一筋長い羽毛がふさのやうにのびていますが、肩に移った魂は、そのふさの端を両手でしっかりとつかまえるのです。」

佐吉はなぜか「盲亀の浮木」ということを思い出しながら、更に問いました。

「天上へ上がった魂が、なぜもう一度地上へ降りて来ようなどと望むのだ。」

ひばりは答えました。

「仕事のあいまに、天の使の声をとおしておのずから傳わって来た、いさゝかの知識しか私たちも持ちあわせておりません。先に天上へ上がってあとから来る者を待っていた魂と、あとから天上へ上がって先のをたずねていった魂とが、再会の喜びに燃えたつのはほんのつかのまであって、どうも、それらが互に調和して、そこの新しい生活をそのまゝにくり延べてゆくわけにはいけないやうです。これを家族であつた者たち同志の範囲にかぎって言ってみても——二十歳そこ／＼でなくなった父親が、八十歳以上になってしまったむすこと再会してみても、それと知らされた顔を双方でながめあつていゝるばかりです。家庭という單位にしても、それ／＼が、自分のなくなったときまでの成員を、それだと信じこんでしまつてゐるのです。子どもたちを結婚させる以前に、自分自身なくなった父親や母親は、子どもたちをふたゝびむすこや娘としてそばへ引き寄せようとしては、それには、むすこや娘の配偶者たちが反対します。その他にも、いろんな事情が生じてきますが、とにかく、こんなぐあい、多くの魂の中には失望のあまり、むしろ以前の生活の記憶に豊かな地上の世界へもう一度降りたやうと希望するものが現われてくるのです。身うちのだけか、次に天上へやってくるまで、彼らは辛抱

して待つていなければなりません、それから以後は、彼らの自由意志で地上へ降りることが許されず。それらの魂を暖かい氣候の間に、地上へ運ぶのが私たちひばりの仕事なのです。私たちは、運び降ろした魂を、開ききっている野の花の上へそと降ろして、載せておいてやるのです。すると夜の中に、彼らは花弁を傳い、花筒を傳い、莖を傳い、根を傳わって土地の中へと沈んでゆきます。その中には彼らは、はっきりと目が見えるようになるのですが、その代わりにこんどは、何も感ぜず、何も望まず、何も考えず、たゞ、すべての事物とその移りゆきとをながめ続けるだけの魂となって、大地に納まることになるのです。どうか私を野に連れて行って放してください。近ごろ、地上へ降りて来る魂の数はかぎりもなく多いのですから。」

聞いているうちに、佐吉の心は寂寥の度を深めてはきましたが、同時に「あせり」の影はしだいに薄らいでき始めました。

「天上に残った魂はどんな生活を続けているだろう。また、そこから降りて来た魂は、いったいいつまで、そうやって大地に納まっているのだろう。」

しかし、彼がいくら耳を澄ましてみても、ひばりのチ、とかすかに鳴く声以外、ひばりのことばの方は、もう少しも聞えては来ないのでした。

翌朝早く——。佐吉はひばりかごを例の丘のすそへ携えて行って戸をあけ放ち、自分にはぜの木のかたわらにつえを突いて立ちました。めくらのひばりは、澄みきった鳴き声とともに直ちに空へ舞い上がり、その仕事を生き／＼と開始しました。うむことなく、上がり下がりの運動がくり返され、相当の時間が経過しました。更にもう一度舞い上がり行って行ったひばりの声が、上りつめた高みであまりい

つまでも鳴きふけているのをいぶかって、佐吉がふと顔を——というよりも、耳を——そちらへ振り向けたとき、またもや、その声に重なって、ひばりのことばがはっきりと彼に傳わってきました。そのことばはこう言っていました。

「私はほとんどすべてを失ってしまったとるに足りないひばりです。私は命のあるかぎりこの仕事を勤めさせてもらえばそれで満足です。私は人間の魂のことが痛ましくてたまりません。人間の魂はとりどりに天上と大地とへ引き離されたまゝで、いつまでも、しあわせな一つ所に落ちあうことはないものでしょうか。」

すると、声音のまるで違ったことばの、こう答えるのが聞えました。

「かならずしもないとは思えない。」

天の使のことばだ——と佐吉は直覚しました。ひばりのことばが問い続けました。

「人間の魂のことを考えるにつけて、今の私は、ひばりの死後のことをも考えずにいられません。とるに足りない身だと言っておきながら、すぐこんなことを言うのは氣がとがめますが、ひばりの魂はどうなるのでしょうか。私は人間の子どもの手にかゝって死んだかわいそうな私の子どもたちのことが忘れられません。」

天の使のことばが答えました。

「あらゆる生きものの魂のことを平等に、まず人間自身が考えるべきだったのだ。あまりにも人間の魂のことだけにかゝずらい、その知恵と判断と要求だけにかゝずらったことが、人間の死後の魂を混乱させるのだ。」



ひばりのことばが問いました。「それでは、私の子どもたちも、身の滅びない魂を持っているものと考えてよろしいのでしょうか。」

こんどは、天の使のことばが問い返しました。

「人間の魂やひばりの魂が最後におちつく先をおまえは知りたいと言うのか。」

ひばりのことばが答えました。

「いゝえ、子どもたちの魂さえおちつくべきところへおちつけるのなら、私の願いは足りるのです。それがどこであるかぜひ知ろうとも思いませんし、私自身せひそこへ行こうとも思いません。」

「そのことばだ。だれでもいい、そのことばをはっきりと言いきれたとき、その者においては、いっさいが成就するのだ。」

天の使のことばが、ほとんど叱咤するほどに高らかに響きわたったように覚えて、佐吉はわれしらず手にしていたつえを、ひっくりかえして持ち直しました。正しく、太い方を上にし細い方を下にして、砂の中へ強く突き刺したのです。その瞬間、空を仰いでいたまゝのかっこうで、ふしぎにも、彼の目は双方ともハッキリと視力を恢復したのでした。そして同時に、ふいと鳴きやんだ親ひばりが、まるで石のようにまっすぐに落ちて來るのが認められました。

「親ひばりにおいてはいっさいが成就したのだな。」と佐吉は直覚しました。直覚しながら、彼は丘をいっさんに、ひばりの落ちた方へ向かって駆け下りて行きました。はたして——その、青草の厚く茂った上に深く沈んで、親ひばりは、いかにも平和そうに命のなくなったからだを横たえておりまし

た。

(雑誌「文学界」による)

【学習の手引】

- (1) この童話のおよそのすじを言ってみる。
- (2) 佐吉が持つあだ名を列挙し、その由来を簡単に書いてみる。
- (3) 佐吉の性格について話しあう。
- (4) 佐吉のひとくせある行動の意味について話しあう。
- (5) ひばりの話に託された作者の思想について考え、感想を発表しあう。

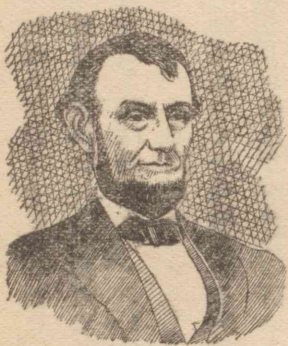
四 リンカーン

矢内原忠雄

本課はアメリカの偉人、リンカーンの評傳の一部である。

矢内原忠雄は、明治二十六年（一八九三）愛媛縣で生まれた。経済学者。東京大学教授。著書には「余の尊敬する人物」などがある。

リンカーン  
（一八〇九—一八六五）  
アメリカ合衆国第十六代大統領。



四 リンカーン

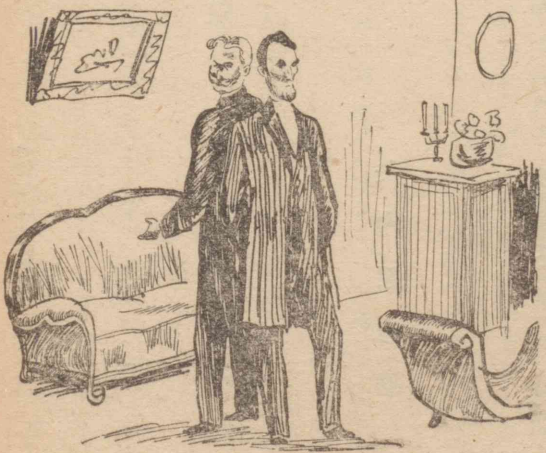
リンカーンは平民中の平民でした。平民というのは、肩書・身分など外側の裝飾物なしに、生地まじのまゝに通用する人間のことです。花にすれば野花、石にすれば自然石です。リンカーンの長所は平民の長所であり、彼の欠点もまた平民の欠点でした。

ホワイ  
ト  
ハ  
ウス  
ワ  
シ  
ン  
ト  
ン  
に  
あ  
る  
ア  
メ  
リ  
カ  
合  
衆  
國  
大  
統  
領  
の  
執  
政  
館

リンカーンには多くの欠点がありました。その一つは起居ふるまいの粗野なことでありました。こ  
とに婦人に対する礼儀作法に不慣れでありまして、たび／＼人から注意を受けました。  
彼は大統領として、多数の訪問客に接しましたが、ずいぶんふるった逸話があります。知名の政治  
家たる上院議員シャーマンがはじめて彼をホワイトハウスにたずねたとき、リンカーンはいきなり、  
「あゝ、あなたがジョンニシャーマンですか。ひとつ背比べをしましょう。」そう言って、あつけにと  
られて立っている威厳ある政治家のそばへつか／＼と歩み寄り、背中合わせに身長を比べました。リ  
ンカーンは自分の身長の高いことが自慢だったので、こ  
んな賓客の迎え方は、めったにあつたものではありません。  
しかし、シャーマンはこの初対面で、一度でリンカーンに推  
服し、彼の忠実な友人となりました。

あるとき有名な黒人説教家フレデリックダグラスがホワ  
イトハウスをたずねたことがあります。リンカーンは彼の  
要求をいれませんでした。しかし、ダグラスは室から出て來  
たとき、喜びに興奮して叫びました。「彼は私を人間として  
扱ってくれた。彼は一瞬間も私に、皮膚の色の相違を感じさ  
せなかつた。」と。

すべての人が、生地のみでリンカーンにはとおとかつた  
のです。彼は自ら生粹の平民でありましたから、平民の民衆



の間に圧倒的な信頼を得てしましました。「アブおや。」「Old Abe」または「父アブラハム」「Father-  
Abraham」とうのが、民衆の間における彼の通り名でした。粗野は、紳士淑女にとつては欠点であ  
るかもしれませんが。しかし、偽善と虚礼よりははるかに許すべき欠点ではないでしょうか。

ナイアガラ  
瀑布  
アメリカ合  
衆國とカナ  
ダとの國境  
を流れるナ  
イアガラ川  
にかゝる大  
瀑布。  
シェークス  
ピア  
(一五四一、一六〇  
六)イギリスの  
劇作家。詩  
人。  
バーンズ  
(一七三二、一七八  
六)スコットラ  
ンドの詩  
人。

リンカーンがまだ若い弁護士であつたころ、ナイアガラ瀑布を見物して來たことがあります。友人  
のハインドンが、「どうだった。」と聞きますと、「ぼくはあの莫大な水がどこから流れて來るか、驚い  
た。」と答えたそうです。それでハインドンは、「リンカーンは物質的にもごとを見る人で、詩を解  
しない人だ。」と語っています。しかしこのリンカーンの答の中には大なる驚異の感情があります。し  
かして驚異の感情は詩でありませんか。右のリンカーンの感情は、けつして物質的な觀察ではありま  
せん。偉大なる自然の前に、平民の魂が驚異した姿です。聖書とシェークスピアとバーンズとを愛読  
したリンカーンが、詩を解しないわけはありません。たゞ彼は青白い感傷型の詩人でなかつた、とい  
うにすぎません。リンカーンの性格は粗野ではありましたが、けつして散文的ではありません。彼の  
性格そのものが詩であります。しかるに彼とともに住んだ側近の友人の多くが、彼の中に包まれてい  
る金剛石に氣づかなかつたのです。

リンカーンの憂鬱は、彼の境遇がしからしめたこともありましよう。彼は貧しく生まれ、貧しく育  
ち、幼いときから額に汗して自分のバンをかさがなくてはなりません。彼の家庭もそんなに幸  
福なものではありません。戦時大統領としての公の労苦が、彼の憂鬱を増したことは、申すま  
でもありません。しかしリンカーンの憂鬱は、境遇の産んだというよりも、もつと深いものがあつ  
て、性格的であり、人間としての苦惱に感じやすい感情であつたように思われます。

一面リンカーンはすぐれた諧謔家として、人を笑わせ、自分もよく笑いました。彼の悲哀と彼の快活とは、どちらもきわめてしぜんであつて、底しれぬ深さからわき出しました。それはあたかも全然別な二つの泉から出ると思われるほどでしたが、しかしそんなことはありえません。深いところ、一つの泉から出ているのです。その泉とは、「平民」の魂です。すべての装飾を取り除いた人間の生地——神がおのれの像に型どつて造りたもうたまゝの人間の生地から沸き出たのであります。この魂は粗野ですが、眞実そのものです。眞実な魂が虚偽の世に生まれてきたとき、おのずから深い悲哀がその性格たらざるを得ません。しかるに一面においては、生地のおのづから眞実な魂が、同じ人間の中に潜む生地の魂に接するとき、そこに性格的な快活が表われざるを得ないので。

眞実と單純とは平民の美德です。リンカーンは人間としてこの美德を持ちました。それが彼をして主義を持ち原則を持つ政治家たらしめたのです。リンカーンの立つところ、彼の政治上の意見と政策とはなんらのあいまいも疑いもなく、明白に、公然と、山の上の城のように見られました。リンカーンは、「いかなる政治上の意見をいだしているかわからない政治家」、「いかなる政策を行うか、政府に立つてみねばわからない政治家」とは類を異にする政治家でありました。しかして彼の主義あり原則ある政治が、建國以來稀有の非常時にあつて、國民に確固たる目標を興え、よく國難を克服し、かつ奴隷解放の大事業を成し遂げたのです。リンカーン自ら言ったことがあります。「私が事件を支配したとは言わない。むしろ事件が私を支配したことを率直に告白する。」彼は奴隷解放をば、自己のなした事業であると思いませんでした。しかし彼の一貫したる眞實にして平明なる政治的の把握と、その原則を遂行するについて信頼しうべき彼の性格とがなかつたならば、時局は混迷して帰するところを知らなかつたに相違ありません。勢いを作るのは社会であるが、それに明確な形と方向とを與えるのは政治家の任務です。この意味で政治の貧困は人物の貧困であるといわねばなりません。

平民リンカーンはキリスト教の教義について多くを語っていません。したがつてこれをいかに解したか、いかに信じたかについて、私どもの知るところは乏しくあります。たゞわかっていることは、彼が聖書をよく読む人であつたこと、祈る人であつたこと、攝理の神を信じ、自己の生活も國の政治も神の經綸の中にあることをかたく信じたことであります。

平民詩人ワルト・ホイットマンはワシントンの町で、リンカーンの散歩姿をよく見上げたことがあり、その深く刻まれた顔の線と、深く潜んだ悲しみの目とから、深い印象を受けたそうです。ホイットマンはリンカーンを愛敬しました。平民が平民の心を知つたのです。リンカーンの死にあつて、彼は数編の哀悼詩を作りましたが、その中の最も短い、わずか四行の詩は左のようなものであります。

「このちりはかつてかの人なりき、

やさしく、平明に、正しく、確固として、その注意深き手のもとに、

いかなる國と時代の歴史にも知られざる最悪の罪にさからひて、

合衆國の結合は救はれたり。」

〔余の尊敬する人物〕による。

#### 【学習の手引】

- (1) この文のおよそのすじを話してみる。
- (2) リンカーンの性格のそれ／＼の面を列挙してみる。
- (3) リンカーンの逸話について、感想を発表しあう。

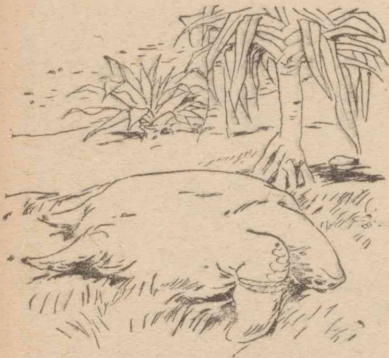
ワルト・ホイットマン  
（一八一九—一九九三）  
アメリカの詩人。

- (4) リンカーンが特に聖書とシェイクスピアの書とを愛読した理由について話しあう。
- (5) リンカーンの偉さがこの文のどこに表われているかについて調べ、かつ話しあう。
- (6) この課の読後感を作文にまとめる。
- (7) できればこの課をもとにしてシナリオを書いてみる。

五 しょうがくぼう

北原 白 秋

しょうがく  
ぼう  
大うみがめ  
の別称。熱  
帯の海に住  
む大がめ。



本課は島の初夏を背景に、しょうがくぼうを主題にした小品文である。

北原白秋、本名は隆吉。明治十八年（一八八五）福岡縣で生まれ、昭和十七年（一九四二）に没した。詩

人。著書には、「邪宗門」「思い出」「水墨集」などたくさん詩歌集があつて、その大部分が「白秋全集」に収められている。

うららかなうららかな、なんともかともいえないうららかな南の島の初夏の一日である。宮の浜の白い弓形のなぎさから影の青いバナナ畑の方へすべり登る小道のそば、小灌木の境界線に近く、一本の光り輝くゴムの大樹が高く揺らめいている。その下にしょうがくぼうが仰向けにころがっているのである。たゞそこにいつからころがっているともなく、ころがされているからたゞころがっているというふうであ

る。大きな大きなしょうがくぼうがゆったりと、まん丸い卵色の腹の甲羅を仰向けて、たゞころがっている。むろん、四肢は堅く縛られているのでそのひれを動かすことさえ自由でない。ずう体は大きいし、二條の太い荒なわまでがぐる／＼巻きにくい込んでいる。それでなくとも、いったんころがされたが最後、一日かゝって起き返るか二晩かゝって起きられるか、このおうようなろ／＼の海がめの身ではなんだかすこぶる怪しいものである。うれしいのか、悲しいのか、苦しいのか、またはとうとうあきらめ果ててしまったのか、それぞというけしきもみえない。たゞ首をあたりまえに出してあたりまえに目をあけている。そうしてなんのこともなく空を見入っている。もつとも、それも仰向いているから目が空に向いているというだけである。澄みわたった明かるい天のけしきをみつめているのか、またはうららかな雲のゆききや、風の流れに恍惚と思いを凝らしているというのか、それとも青るりの大海の響、びんろう・やし・バナナ、種々の熱帯の物のおいをうつゝ心もなくかき分けて、なつかしい生まれ故郷の海の波のまに／＼靈魂を漂わせているのか、何がなんともわけのわからぬ夢見るような目をあけている。

時は正午である。五月といつても島の五月は暑い。太陽は直射し、いよ／＼ゴムの大樹の真上から強烈な光のあらしを浴びせかけると、さんらんたるゴムの厚葉が枝々に限りもなく重なりあつて、まっさらな油ぎった反射を影とともに、空いっばいに揺らめかす。その葉をくゞって来る光線は鋭い原色の五色である。それが幹に当たり、下に寝ているしょうがくぼうの腹をやきつける。そうしていよいよ緑と黄の点々に模様づけられたきれいな海がめの頭が柔らかな雑草の上に更につや／＼と光りだし、うら／＼かなうら／＼かな、なんともかともいえないぬ空のあたりでびんろうの葉をよぎ、うぐいすの

鳴く声が聞える。

十方無礙光、澄み輝く白金、寂寞世界のひとときである。

しょうがくぼろはまぶしそうに目をあけたり、閉じたりしている。うつゝ心はないらしい。たゞゆつたりとところがされているので大安心の形である。おそらく自分がとらわれの身であることすら忘れていゝのに違いない。

カヌー  
丸木舟。

微風がおり／＼ゴムの枝々をそよがして去った。幹の中ほどにひと流れ流れた海の美しさ。向こうに兄島が見え、うら／＼かなそのり色の海峡を早瀬に乗って、白い三角帆を上げたカヌーが走って行く。さりながら、しょうがくぼろにはその海が見えない。頭を海の方に向けては寝ているが、背後にはゴムの木の幹があり、海岸たばこの毛深い葉の草むらがある。たゞこの島の四方八方をとり囲んでいる太平洋の波のうねりが、どこからともなくゆるい調節をまのびに折りたゝんでいゝ。それだけはさすがしょうがくぼろの痴鈍な感覚にもや／＼なんらかの響を受け取るらしい。しょうがくぼろは目をつむってまた目を開いた。

ロスタン  
エドモンド  
リロスタン  
（八六—一九六）  
フランスの  
詩人。劇作  
家。

コケッコッコ、コケッコッコ、コケッコッコ、コケッコッコ……ものに驚いたにわとりの鳴き声が丘の下の農家の方から聞えて来る。畑の甘蔗やバナナの葉陰を分けてこちらへ逃げて来るらしい。一羽二羽、それがしだいに近づくにつれ、鳴き声を潜めてくる。かと思ふと一羽のおんどりがやがてロスタンのシヤンテクレエのような雄姿を現わした。とさかの赤い、骨節の強そうな、羽ばたきのまっ黒い、はちきれそうにはずみかえった驕慢なおんどりにひかされて白い舶來種のめんどりが何かをつゝきながら

ついて来る。とたんに、奇怪な大きいしょうがくぼろのずう体がふいと前にころがっているのが目についた。と、たちまち驚きの叫びをたてて、ケケッコッコ、ケケッコッコ、ケケッコッコ……と逃げに行く。そうしてまたひとしきり忙しそうな叫び声が甘蔗の向こうから聞える。

しょうがくぼろはそれでもゆつたりとしたものである。平氣で大空を見上げている。おとなしそうな空色のひとみがつや／＼とうるみを持って、たゞじつとうら／＼かな天のけしきに見入っている。おそらくかたわらになにごとが起こったかも知らないであろう。身動き一つしようともしない。

時がたった。日ざしはいよ／＼強くなり、音も絶えた空の中をうぐいすの子が苦しうにさゝ、鳴きをしてはまた光って消えた。ふとしょうがくぼろは聞き耳をたてるようにみえた。のっしのっしと人間の歩いて来る足音がしたからである。山から暑い盛りに降りて来た男は、絵の具のあかだらけな仕事服をつけ、まっ黒な怪しい帽子をかぶっていた。まん丸い顔のずんぐりむっくりした三十四、五の男である。この島では油絵かきのことを塗師という。塗師もいろ／＼流れて来たが、こんどの塗師はなか／＼偉い塗師だという。その塗師が傲然とのさばりかえって歩いて来るのである。しょうがくぼろはおそれいらざるを得ないはずである。それなのにしょうがくぼろはなんにも感じないらしい。たゞ恍惚と目を半眼にあけて見ている。塗師はしょうがくぼろをちよいと見おろして、ふ／＼と言つた。そうしてくされたバナナの切れ葉をけ返しながら、まっ黒な墓穴のような岩を描いてある大きな大きなカンバスをたてのように振りかざしてまたずしりずしり。

あとはまたうら／＼かである。強烈な太陽光の下に、赤いがけ、青いバナナ、るりにたいしゃに朱のまだら、輝く黄、空も木も草も、あらゆる目に入るものすべてが、なま／＼しい原色ならざるはなし

である。それが強烈にしょうがくぼうの目をきら／＼と刺激する。ゴムの葉が、微風がくれば五色になる。

しょうがくぼうは批評家ではない。だからこの美しい自然と先ほどの塗師のまっ黒い絵とどれほどの差違があるうとも平気なものである。なんらのふしぎとも感じないらしい。よし、なんとか思ったにしたところで、人間は人間、しょうがくぼうはしょうがくぼう、どうにもならないのである。

しょうがくぼうは恍惚として大空のあなたを見上げている。ゆったりしたものである。幾時かがたった。

しょうがくぼうはあまりのうら／＼かさに思わずう／＼としたが、後の海岸たばこの中から人間がぼいと飛び出したのではと目を開いた。まっ白なホワイトシャツの輝きが見る目も痛いほどしみる。そのホワイトシャツが声をたてて笑った。まるで子どものような無邪気な笑い声である。

——やあ、しょうがくぼうがころがっている。おもしろいな。

しょうがくぼう自身にとってはおもしろいどころの話ではあるまいが、のんきなしょうがくぼうは黙っている。そうして恍惚とその男を見ているのである。

その男はなんと思っただか、こつ／＼とつえの先でしょうがくぼうのまん丸いおなかをた／＼いた。痛くもなんともないらしい。平気なものである。こんどはまた強くこつ／＼と頭をた／＼いた。しょうがくぼうは不感無覚寂寞世界といったふうである。しょうがくぼうはなかく／＼高踏派である。その男は、——おかしいなあ。

と言った。しょうがくぼうにはべつにおかしくもなんともないのである。その男がつえの先でおしりのあたりをこつ／＼と突き当てたと思うと、しょうがくぼうがふいにふ／＼と笑った。口をあけ、鼻の穴をいっばいふくらまし、首を強く一振り振ってふ／＼と笑った。よほどくすぐったかったとみえる。青年はびっくりしたが、これも声を出して笑った。腹をか／＼えてそらの草っ原じゅう笑いころげた。

しょうがくぼうはまたけるりとして空を無心に見上げている。

——のんきななあ、おかしいなあ。

感嘆きわまるといったふうで、さすがのんきな樂天家も、このしょうがくぼうだけにはおじぎをしたようだった。

しょうがくぼうはのんきだと言われているのんきなのがなぜ悪いのか、それとも何かおかしきことでもあったのかなあといったふうにふしぎそうな目つきをした。それでべつに自分をのんきだとも思っていないらしい。あたりまえだという心持。

しょうがくぼうはまたう／＼とした。微風が海の方から吹いてくる。白い雲がぼう々と山のびんろう樹の上に浮かぶ。うぐいすが鳴く。世は太平である。そのうら／＼かさは限りがない。

その男は健康そうな生氣のあふれるような体格をしていた。こんな暑い日に素足で、そのうえ帽子もなんにもかぶらないでいる。しばらくしょうがくぼうを見て感嘆していたが、苦しうにいきなりホワイトシャツを脱いですっ裸になった。玉のような汗がだく／＼その張りきった胴やたくましい両腕から流れ出るのである。ふくものがないので、ホワイトシャツで、こき／＼顔からからだじゅうふ

き取った。そしてなんと思つたかふわりとそれをしょうがくぼらの頭に投げかけておいて、自分もまた暑い天日に全身をさらしながら、またごろりとかたばみの中に寝ころんだ。大きなマドロスパイプを出してゆう／＼とたばこをのんでいる。

しょうがくぼらはまっ白なホワイトシャツを頭からすっぽりとかぶせられて、また恍惚とした。西洋新舶來のそのにおいはしょうがくぼらにとっては、いまだかつて聞いたこともないこともなかったに違いない。それに人間の汗の臭氣の甘ずっぱさ、思わず、また恍惚となって空をながめた。あの青い空はこんどは自分の上に落ちてきてまっ白な光り輝くものとなっていた。日光が柔らかいシャツをこして降りそぐ。

しょうがくぼらは思わずぐっすりと熟睡したのである。

——Kさん、何をしてござる。

青年もうと／＼としていたが、耳慣れた老人の声にはっとして目を開いた。大きなタコの葉の帽子をかぶったきれいな老人がにこ／＼と笑いながらしょうがくぼらと彼とを等分に見おろしていた。

——裸でおいででござるか。この暑いのに裸は毒でござすぞ。

ちよつと、まゆをひそめたが、また莞爾として、

——Kさん、たいしたもののがござしたぞ。

とさもうれしそうに言う。

青年も立ち上がった、そうしてにこ／＼とした。

——ほうれ、これでござす。

老人は肩から掛けていた雑囊のうの中から人間のがいこつの下あごみたような灰色の石を取り出した。

——実に天然でござすぞ。珍しゅうござすな。ほうれごろうじろ、こゝに白いものがぼち／＼いとござしよう。まるで雪が降ったようでござす。

ぼち／＼いというとき、かわいらしく老人は声を小さくした。いかにも白いものが点々としてある。しかし青年の見た白いぼち／＼いは雪でなくてがいこつの下あごに残ってくっついている人間の白い歯であった。老人はその石をたいせつそうに愛撫なでしながら、

——たいしたもののでござす。三百円ものがねうちがござす。

この老人は名古屋の商人であるが、病氣保養にこの島に來ているという。よく暇にあかしてはびやくだんのひねくれた根っ株や、もまたまの木のごつなこぶや、天然の珍石奇木を好きで集めては楽しんでゐる。快活ないい老人である。口癖にしては天然天然とばかり言うのでKさんたちはこの人を天然老人とよんでいる。天然老人はしかし商人である。どんな珍物を見てもすぐねぶみをする。そうしてこれはもうかるなと胸算用してみる。Kがにこ／＼していると、

——題は雪景珍石としたらどうでござしようかな、おもしろいものでござすぞ、買れますぞ。

と、天然老人、しょうがくぼらの方をちらと見る。

雪景珍石が賣れるか、賣れないか、おもしろいものか、おもしろいものでないか、百円の價值があるものか、それとも一錢五厘の價值しかないものか、しょうがくぼらは風流というものを知らないからいっこうにごぞんじがない。たゞホワイトシャツをかぶって黙っている。

Kもしょうがくぼうをちらりと見たが、いかにも氣の毒そうな顔をして、老人をふり返った。しょうがくぼうはよく眠っている。

天然老人は談話をしてる間も若々しい目を上げて見まわしていた。なにか珍物はないかと思つて捜しているのだと思うと、無邪氣な青年Kにはおかしくてならないというふうだった。天然老人はふいとおじぎをして、つかたわらのもたまの木の方へ行つたと思つたと、とつぜん大きな大きな声を出して、さもくく一大珍物を見つけたように叫んだ。

——Kさん、早く来てごろうじろ、たいした珍木でござすぞ、五百田がものはござす。

Kも驚いて飛んで行つたが、老人、ももたまのこぶが飛んで逃げでもするようにあわてて、雜囊をあけると、二つ折ののこぎりを取り出しながら、

——ぼうれ、あのこぶでござす。たいしたものでござしょう。五百田がものはたしかにござしょう。たしかにということばに力を入れて、のこぎりを開きながら、下からじつと天然老人は見上げる。いかにも、うららかなうららかななんともいぬうららかな空の下に、ふしぎな形のもたまの木こぶは、手も届かぬ高いく二股またの枝の間にさんさんと輝いている。老人は一心に見上げながら、下からしきりにのこぎりを動かす手つきをした。

しょうがくぼうはぐっすりとホワイトシャツをかぶつて眠っている。〔自秋全集〕による

#### 【学習の手引】

- (1) 読後の印象を発表しあう。
- (2) 時間の経過につれて、しょうがくぼうとその周囲に見られる変化を、箇條書にまとめてみる。
- (3) 「うららかな」ということはがこの文の中にもつ意味について考えてみる。
- (4) この文の一部分を、しょうがくぼうが物語る形で話してみる。
- (5) 作者の他の作品をもっと多く読む。

## 六 渡りの起原

内田 清之助

本課は渡り鳥の起原に関する多くの学説を紹介したものである。よく読んで、その論拠を吟味したいものである。そのためには、書いたり討論したりすることがたいせつである。

内田清之助は、明治十七年（一八八四）東京で生まれた。農学博士。動物学者。特に鳥類を専攻した。著書に「鳥」・「鳥学講話」などがある。

つばめやがんのように、遠くの方からやって来て、また遠くの方へ渡って行く鳥。すずめなどのようにごく近くを移動する鳥。いずれにしても鳥類の「渡り」ということはまことにふしぎな事柄である。

このふしぎな習性については古くからいろくくの説があるが、これがまちがいない説であると決めることのできる説はまだ現われていない。爬虫類から進化して、始祖鳥の時代になり、それから五千



万年もの長い間にできあがってきた多くの鳥の種類であり、その性質である。彼らを知るための研究にはらわれた人間の努力は、まだ足りないと思わねばならぬ。

これはともかくとして、鳥がどうして「渡り」をするようになったかという幾つかの説を次に紹介しよう。

ダーウィン  
(一八〇九—一八八二)  
イギリスの  
生物学者の  
進化論の創  
設者として  
名高い。

「渡り」の起原について最も古く考えられ、そうして長い間ひろく行われているのはワレスの自然淘汰の説である。ワレスはダーウィンとだいたい同じところに進化論を唱えだした有名な学者である。彼は鳥類の渡りという事柄を自然淘汰ということで説明した。その説の要旨はこうなのである。鳥が春や夏に蕃殖を終り、涼風がたちはじめるところになると、その地方には彼らの食料としている昆虫や木の実がだん／＼減ってくる。そこでもっと豊富な食料を求めて、新しく生まれた子どもたちといっしょに、南の方へと移動を始める。そうして、この移動も最初のうちは、ごく近くを移動して餌を捜しまわっていたにすぎないが、一箇所にとまっていたものよりも、少しでも遠くへ翼をのばして捜したものが、よりよい条件を得ることができた。これが適者生存という理であって、そうしたものが優位を占めうることを、彼らもしげんに悟るようになった。そこで彼らは、しだいに移動の距離を延長した。このようにして、その習性がだん／＼に積もって、何代も何代もそれが傳わってゆき、ついに今日のように、海山を越えて遠く数千キロも渡って行く大旅行をするようになったというのである。これがワレスの自然淘汰の説から出た、鳥類の渡りを解くかぎであった。もう一度以上のことを簡単に言ってみれば、鳥類は餌を求めて移動して行ったのである。ということになるのである。

ところがワレスのこのような説に対して、幾つかの反対論が現われた。その一つの方法として、近

年、ヨーロッパのむくどりがアメリカへ輸入されてひじょうにふえて野生した。それからまだ数年しかたないうちに、むくどりがだん／＼「渡り」のようなことを始め、現在ではその移動のありさまが、完全に「渡り」と考えてさしつかえない性質のものとなったのである。この事実から判断すると、ワレスの自然淘汰の説では、この「渡り」は説明しきれぬことになる。これと同じような例がある。信州浅間の温泉宿の軒ばには、春先き、多数のいわつばめが巢を営むが、これをそのままにしておけば秋になると南へ渡り、だいたいは翌春ふた／＼浅間へ帰る。ところがある年、農林省で、卵からかえったばかりのいわつばめのひなを、浅間から東京の多摩川の先にある鳥獣実験場まで連れて来て、人工的に育て、巢だちをさせてみた。これをほおっておくと秋になって南方へ渡り去る。私たちの予想では、翌春はそれが生まれ故郷の信州の浅間へ帰って来るであろうと見当をつけていた。ところが彼らは信州へは行かず、巢立ち場所の鳥獣実験場に近い八王子に帰って来た。これが年々くり返され、近ごろは毎春、いわつばめが数十羽も八王子の町へ帰って来るのが例になった。これもまたワレスに従えば、当然浅間へ帰るべきはずのものであるが、新たに育てられた第二の故郷の方へ帰って来るといふおもしろい一例である。やはり自然淘汰説では割りきれない結果を得たのである。

このほかに、また次のような、ワレスの説とは違った別の考え方がある。

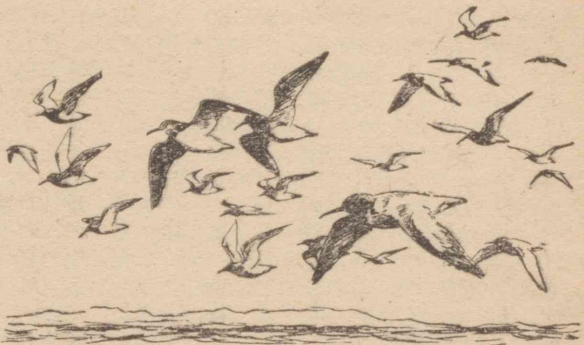
欧州でもアメリカでも同じであるが、ひじょうな大昔には、北の地方には渡り鳥はあまりなく、すべて留鳥ばかりが住んでいた。ところがある時代に地球の気温がだん／＼くだって、北極の水がしだいに南の方まで進むようになったことがある。この時代はいわゆる氷河時代であるが、その時氷が南へ進むにつれて、今までそこに住んでいた鳥が、氷のために食料を得ることがむずかしくなり、南の

水の少ない地方へやむなく移動するようになりだした。もちろん初めは短距離の移動であったが、たび重なるうちに、ついには遠い南の方まで飛んで行かなければ餓死するような状態になり、しだいに移動の距離と時間を増していった。しかし鳥には、もと巣を造った所を慕ってもどって行く習性があるもので、ひとたびは氷に追われて南へ移っても、春になって氷が北へ退けば、鳥もふたたび北の方へ舞いもどる。こうした経験が積もり積もって、ついに今みるような大がかりな渡りの習性ができあがったというのである。この説では、渡り鳥の現象は氷の南進に伴なっているという考え方である。氷河時代が過ぎると地球の温度も上がり、氷が南の方まで張るようなこともなくなった。そうして、氷は北へもどり、今まで氷に埋もれていた所もふつうの土地となった。しかし、鳥類の移動する習性だけは当時のまゝを残している。今日の渡りはその続きであるというのである。

また以上の説とは逆のことを唱える人もある。この説では、鳥類の元の棲息地は北であるとしているが、こんどの説では、鳥の故郷はがらぬ南だったというのである。南の地方で蕃殖し、だん／＼鳥の数が多くなるうちに、冬が来て餌が少なくなり、しぜんに食料難がもちあがるわけである。そこで新たにふえたひなは、食を求めて諸方へちらばる、ちやうどそのとき、氷河時代の終りごろにあたっていた。氷は徐々に北の方へ退いていく。そうして、たくさん蕃殖した鳥も食を求めて、氷のあとから北へ／＼と移る。なるべく他のなかまの来ないような遠くまで翼をのびた方がたくさんの餌にありつくことができた。このようにしてだん／＼北へ進むことが激しくなった。こうして渡りの習性ができたというのである。前の説と同じような論であるが、たゞ鳥類の元の棲息地を、北ではない、南であると逆に考えたところが違うのである。

この二つの説はいずれも氷河時代に結びつけて渡りを説明したものである。

更にこれと違った一つの説がある。それは趨光性すなわち光を慕う性質に関係ありとするものである。それによると、鳥は光線の最も多い所を好んで求め歩くもので、四季により、太陽が赤道を南あるいは北へ移動するにつれて、鳥もおのずからそれとつしよに南へあるいは北へと動くようになつたというのである。そのよい例としてあげられるのは、渡り鳥の中で最も大旅行をする極あじさしという鳥である。この鳥は六月の半ば、すなわち夏至の前後のいちばん日の長いところに、北極から遠くない北緯七十五度の附近で蕃殖する。北極のそのころは、ほとんど夜の無い世界である。それから八月の末になると、巢だちしたひなを連れて北極を出発し、南へ／＼と旅を続け、冬至の前後の日の長い頂上に、南極の近くにまで達する。つまり北半球にあるときも日長の絶頂、南半球にいるときも日長の長い絶頂にあたる。南極に滞在する期間は北極のそれよりやゝ長く、十一月の半ばごろから三月初めまでである。三月初めから五月末までは、南極から北極へ向けて旅をする期間である。彼らの旅は地球の北と南の両極をつなぐものであって、その延長は実に二万二千マイルになる。その旅行を続ける時間は約二十週間とされている。そうすると、彼らの一日の平均速度はおよそ百五十マイルということになる。ろく／＼休む間もなく飛び続けていることがわかる。世界じゅうの動物中最も日光に多く浴するのは、この鳥であると思われる。一年を通じて、一日二十四時間近く日光に当たたる場合が八箇月続き、あと四箇月間も、最も日の長い地方を選んで旅行することになる。この極あじさしの例ははなはだ特殊のように思われるのであるが、鳥類がどんなに光を求めているかという説明の一例にはなる。そうしてこの光を慕う性質、つまり趨光性を渡りの起原だとする説のために、たび／＼引き



あいに出されるのである。

このごろになつて、カナダのアルベルタ大学の教授であるローアンという学者が、また一つの説を出した。それはおもしろい実験をやつてから言いだした説で、注目すべきものを持つてゐる。ローアンの言うことは、渡りの動機は、鳥のからだのしぜん働きのによるものであるといふのである。そのからだのしぜんの働きのことを生理的衝動といつてゐるが、その原因は、けつきよく太陽の光線にあるとしてゐる。彼はそれを実験したうえで証明した。私たちも、よく、春になつて渡り鳥が北へ立ち去つた後、一、二羽悄然として渡り残つてゐる鳥を見かけることがある。ローアンはその渡り遅れた鳥に着目した。そしてけつきよく、それらの鳥はけがをしてゐることに注意を向けた。

ことに蕃殖の妨げとなるようなけがをした鳥に多いのである。こゝで彼は次のような実験をやつてみた。まず、夜も電燈の光にさらしながら渡り鳥を飼つてみた。すなわち、電燈の光で目を長くすることによつて、真冬に春と同じようなからだの状態に鳥を導いたのである。この電燈の光で鳥の成熟を早める方法は、日本でも早くから行われてゐることであるが、これはほかのところでは話すことにしよう。

ともかくローアンは電燈の光によつて、鳥が春先のようなからだのぐあいになることに努めた。そのしかけを受けた鳥は、真冬にもかかわらず、まるで春がきたような状態を現わし始め、鳴く鳥はに

ぎやかにさえずるし、卵もできた。すべてがちょうど蕃殖期間のような生き／＼としたようすを表わしてきたのである。そこでローアンはこのように細工をした鳥と、そんなことをせずにはふつうに飼つてゐた鳥と、二通りの鳥にしるしをつけて冬のさなかに放した。すると、ふつうに飼われた方の鳥は、放たれてもその地方に留まつてゐる。それはがんだりかその地方で冬越しをする鳥なのだからそのはずである。ところが、電燈の光で飼われた方は、ちょうど春のように北へ遠く離れた所まで飛んで行つた。いわば春の渡りをしたのである。こういうことから判断して、鳥は光線の影響でからだのうちに生理的衝動が起り、それによつて渡りをするのが証明されるというのが、ローアンの結論であつた。

このローアンの説もまた批評された。それによるとローアンのこの実験によつて、鳥が生理的衝動を起すようになったのは、光線の影響ではない。それは夜も晝のような活動を長く続けた結果だといふのである。そこでローアンもその点に気がつき、電燈の光を使わずにむりに鳥の活動を続けさせてみたところ、やはり同じような結果を得たのである。

それはともかくとして、渡りは鳥が生理的衝動にかられて行ふのだというふうには近ごろでは人々に考えられるようになってきた。

あらしの来る前に、鳥が大群をなして渡るといふことが昔からいわれている。鳥があらしになるのを知つていて、あらしの来る前に、それを避けて飛んで行くといふのである。

この説はすべての渡りの原因としてはうなずけない説である。それから鳥があらしの来るのを前もつて知るといふのも怪しいと思ふ。

それで、事實は一群の鳥があらしに会って、急いであらしの進行より早く／＼と飛んで行くのに、つぎ／＼の所にいる鳥が加わって大群になり、そして渡って行くのではないかという考え方をする人がある。またロシアのフォンロミツデンドルフという学者は、ヨーロッパの春の渡りの径路が多くシベリアのタイミール半島に集まっていることから判断して、次のような説を出した。この半島には磁力の中心があり、そして渡り鳥も体内の磁力の影響を受けて、こゝに集中するのである、と磁力説というものを出した。この半島に渡り鳥の径路が集中しているのは事実であるが、彼の説は、一般に認められていない。

だいたい、以上で渡りの起原に関する主要な説を紹介した。けれども、そのいずれの説を採ってみても、まだ完全には鳥の渡りを説明し盡くしていない。はゞからずに言うならば、食物のためとか、光線のためとかいうような単純な原因で、複雑きわまる渡りの現象を説明することは、おそらくむりなことであろう。鳥類の歴史を細かく考察してみると、前にも述べたとおり、太古から現在の鳥になるまでには、驚くべきほどの時を経ていたのであるから、歩一步進化して今日の鳥となったと考えるのが当然であろう。渡りの習性のようなものも、いろ／＼の理由がからみあったあげく、あまたの要素が作用しあつて発達してきたものと思われる。それをなにか単一の理由で解決しようとすることは、はなはだしくむりなのかもしれない。

〔渡り鳥〕による

【学習の手引】

- (1) 「渡り」の起原に関する諸説を列举し、おの／＼の論点を明らかにする。
- (2) 右の諸説のうち、どの説がどんな点でよいかについて討論する。

- (3) 右の諸説を分類し、その結果を発表して批評しあう。
- (4) 日本にいる渡り鳥についてもっと調べる。
- (5) あることに関して幾つかの学説がある場合に、それをまとめて文章に書いてみる。

七 ことばの楽しみ

本課は島崎藤村の「小さなことば」・「消息」・「いろはがるたより」と、柳田國男の「國語の成長」とから組み立てられている。

一、小さなことば

島崎藤村

島崎藤村、本名は春樹。明治五年（一八七二）長野縣で生まれ、昭和十八年（一九四三）に没した。詩人。小説家。明治・大正・昭和の三代を通じて活躍した文壇の巨匠である。著書には、「藤村詩集」「千曲川のスケッチ」・「破戒」・「嵐」・「夜明け前」などたくさんある。全作品は「藤村全集」に収められている。

小さなことば

いい手紙を人からももらったときほどうれいものはない。真情のこもった手紙は、ほんのぶさたのみまいのようなものでも好ましい。それが何度も読み返してみたいような細かい心持までよく表わされたものであれば、なお／＼好ましい。

わたしたちの母の時代の人たちは、今日の婦人のように手紙を書きかわすことも、あまりしなかったように思われる。わたしは少年時代に母のひざもとを離れて東京に遊学した者であるが、郷里にある母から手紙をもらったことがほとんどなかった。母からのたよりといえば、いつでも兄嫁が代筆してよこした。今日から考えると、母が子に送る手紙を書いたこともないなどは信じ難い。しかしじつさいそういう時代もあった。

昔は手紙を書くことを知らない婦人すらあった。手紙といえは、おゝよそ定められた手本があつて、そういう文範の教える書き方によらなければ書けないものだと思つた人たちが多かつたらしい。そういう昔にも、いい手紙を残した婦人たちがなくもない。わたしはある商家の老婦人がその娘にあてた数通の手紙の残つたのを読んで感心したことがあつた。その老婦人の書いたものも「一筆しめしあげまゐらせ候」から始めて、「あら／＼かしく」で結んだものではあつたが、内容は自由に、昔ふうな手紙の型のかたさなどは少しもなく、細かい心持もよく表われていて、子を思う母親の心があらずからそんないい手紙を書かせたのだと感心したことがあつた。その中には、「どうして自分の生んだ娘はこんなやくざ者ばかりか。」と嘆き悲しんだことばのあつたことを覚えてゐる。

今日の婦人には、もはやわたしたちの母の時代のような窮屈さはない。婦人の教育は盛んになり、いっさいの古い型は破れ、見るもの聞くものは清新に、深い窓にのみこもり暮らした昔の婦人に比べたら、実にひろ／＼とした世界へ踊り出してきている。これほどの時代に生まれあわせた人たちが、思うことを自由に言い表わせないはずもない。

ところが、わたしは身のまわりに集まつて來る諸方からの音信に接するたびに、これはと思うよう

な手紙を書く婦人の少ないのに驚くことがある。なにも言いまわしの巧みさを求めるでもない。たくさんなことばを求めるでもない。真情が直叙されてあつて、その人がよく表われていればと思うのだが、そういう手紙も少ないものだと思う。もちろん、書けば書いたで、書かなければ書かないで、とかくもの足りなく、生活も豊富で、会つて話してみれば感心するような婦人が、どうしてこんな手紙を書くかと思つて心に驚くこともある。近ごろ、わたしはあるお嬢さんが人のもとに寄せた手紙のことについて、その話をまた聞きしたことがあつた。それを受け取つた人は、これが今の日本で最も進んだ教育を受けたというお嬢さんの書いた手紙かと、そう思つたという。現代の人の口にはほる問題でおよそ知らないことはないというほどのお嬢さんにして、どうしてそんな感じを人に與えるのか。お嬢さんお嬢さんを書くことは別のものであるのか。手紙を書くということも一つの才能であるのか、古い技巧や形式を捨てることかかえつて人をこだわらせるのか。

それにつけて思い出す。かつて外國の旅にあつたころ、ことばの不自由さには自分でも苦しみ、在留する人たちからもよくその話を聞かされた。國の方で語学の教師が勤まるほど外國のことばに親しんだ人でも、一步海の外へ身を置いたときは、くつ一足注文するにもまごつくものだとの話などが出たことを覚えてゐる。ある人がイタリアに留学したばかりのころ、その人を泊めたイタリアの宿の婦人は不審をうって、「こんど日本からみえた客はふしぎな方で、話をさせては少ししかイタリア語を話さないが、手紙なら実にすら／＼とお書きなされる。」と云つて驚いたという話もある。わたしたちの語学は多く目からはいる語学で、耳からはいる語学ではないのだから、日常使用する些細なことばの語彙には乏しくて、書物の中に出てくるようなむずかしい名詞・形容詞を暗記していることは、しばし

ば外國人を驚かす。あるロンドンの婦人は、日本から行った留学生を前に置いて、「あなたがたは大きなことばはよく知っているが、小さなことばをごぞんじない。」と言ってみせたとか。どうしてこんなことをこゝにくどくどしく書きつけてみるかというに、そのイギリス婦人が言ったという大きなことばと小さなことばの関係こそは、わたしたちの忘れてならないことで、一度そのことばの秘訣を会得したら、自由に思うことも言い表わせるからである。これは会話のうえのことのみかぎらない。もの書く秘訣も、実はそんなところに潜んでいるのではあるまいか。

そこで、わたしは婦人の書く手紙のことに帰って、こんなことを考えてみる。なるほど、教養とも書くこととは別のものであるかもしれない。手紙を書くということも一つの才能であるかもしれない。古い技巧や形式を捨てるのが、かえって人をこわばらせる場合もあるかもしれない。しかし、大きなことばを知るとともに小さなことばを知って、その秘訣をつかんだなら、すくなくとも生きた手紙を書きうるであろうと。

現代の人の口にのぼるあいことば、新聞雑誌の中に見つける新語、書物の中に出てくる学問上の術語、それらの多くは大きなことばである。わたしたちが現に口にしていながら、それに気がつかずにいるような、それらの親しみもあれば、陰影もある日常の使用語の多くは小さなことばである。筆を執り、もの書くほどの者は、いずれもこの小さなことばをおろそかにしない。故福沢諭吉翁は、あのとおり明治初年のころに文明論を書いた人であるが、あれほどの論文も大きなことばばかりでは書かなかった。

福沢諭吉  
(一八四一—一九〇二)  
大分縣の人。  
慶應義塾  
の創設者。  
思想家。  
教育家。

こゝに昔の人の書きたい手紙の一節がある。大きなことばばかりでわたしたちの心が訴えられな

ことばは、この手紙の一節を味わってみてもわかる。

武江  
武藏の江  
戸。

「……まつたけ・ごしょがきは心のまゝに食ひちらし、今は思ひの残るものなしと。暮秋二十八日より三十二日めに武江深川に至り候。盤子につかはされ候御返翰は、熱田は人々とりこみ候へば、封のまゝにて岡崎まで持ち参り候て、窓の破れより風吹き入り、手の透きまより月ちりかゝれる、いをの油のなまぐさきよこれ行燈の前にて、御文まづ開く。涙、紙面にそゝり候。」  
手紙もこんなふうには書いたらどんなに楽しかろう。そして、こんなに真情が直敘されたなら、もの書くそのことが直ちにわたしたちの心を満たすことであろうと思われる。

### 消息

なによりの梅干、お送りくださいありがとうございますとぞんじます。朝茶に添えて梅干をいたゞくのは私の習慣のようになっていきますから、これから当分はお送りくださったものを毎朝の友として、そのたびに御地のことを思い出すでしょう。あのおはがきも花のことがいっぱい、いいおたよりでした。

近ごろはとかく御病氣がちのよし、まことにお氣の毒にぞんじます。過日君に会いまして、今の御住所を知りました。出版部御在勤の時代は何かとお世話まになりました。たゞ今こゝに同封のものはおみまいのしるしばかりにお送りいたします。私もそう丈夫ではありませんが、御承知の出版に際し、いろ／＼昔を思い出して、このおたよりをいたします。

過日はいい御返事もあげられないで失礼しました。いつかまたお役にたつ日もあろうかと思ひ直して自ら慰めます。

手紙で申しあげたことは、B君のお招待にもと思つてお招きしたしだいですが。御遠慮なくお出かけください。あまりとつぜんにこんな催しを思ひたつたためか、D君よりも同じようなお尋ねで、会費は幾らだと申し越されましたから、「会費」はいりませんが、御持参くださるなら「諸誼を」と答えておきました。

元氣にお暮らしですか。どうかしてことしの新しい秋の目を第二の誕生日ともしたいものです。

雨の日にIさんがみえました。先方の人物も性質もよくわかりません。Iさんはたゞ中間に立つてその話をとり継がれるまでの人ですから。

先方では私に親になつてくれるかとの意向もあるようですが、現在りつばな親があり、函館にはまた私などよりもつと縁故の深い親戚もあるのに、いきなりそういうことを問題にされるのは少しおもしろくないような氣もしています。いづれにしても当人同志がよくつきあつてみて、お互にたのもしく思うようでしたら、そのうえで御相談にしましょうと、Iさんまで答えておきました。同封のものにはIさんが持参された履歴書です。御参考までにお目にかけてみます。

御新著を感謝します。人がわらじばき、しりはしよりになつたときには、実におそろしい力が出るものだということを、貴著によつて感じました。そこからほんとうのものが生まれてきているように思われます。私は愛読者のひとりとして、このお礼を申しあげます。

「いろはがるた」より

長いこと自分は民謡を書くことを思ひたつて、いまだにそれを果たさずにいるが、このいろはがるたもそんな心持から作つてみた。私の「ふるさと」や「おさなものがたり」は、形こそ童話であるが、その心持は民謡に近いように、子どものために作つたこのいろはがるたも、やはりそれに近い。

ろ 槽は深い水、棹は浅い水。  
ほ 星まで高く飛べ。

ち 小さいときからあるものは、大きくなつてもある。

ぬ 沼に住むなまず、沼に遊ぶなまず。

よ よいお客はあとから。

な なんにも知らないばか、何もかも知っているばか。

む 胸を開け。

あ おもちゃは野にも畑にも。

ふ ふしぎな御縁。

こ こまの澄む時、心棒の回る時。

し しあわせのあさって。  
せ せみはぬけがらを忘れる。

〔静の草屋〕による

## 二、國語の成長

柳 田 國 男

柳田國男は、明治八年（一八七五）兵庫縣で生まれた。民俗学研究の権威者。著書には「雪國の春」・「山の人生」・「日本傳説集」などたくさんある。

文語すなわち目で読むことばだけを、「國語」だと思ふのは誤りである。そうは思わなくとも文語さえ学んでゆけば、しぜんに他の一方の口語というものが、覚えられると思ふのもまた誤りである。二つは似た点もあるというだけで、同じものではけっしてない。文語にはなくて口語だけにはあるという、特別の性質といつてよいものが幾つもある。聞けばなんでもないことばかりなのだが、たぶん皆さんはまだ氣がつかぬであろう。

その一つにはことばの數量が、口語にはひじょうに多く、文語はこれに比べるとずっと少ない。言う人聞く人が一つのことばのつもりでいても、その実、用いどころが少しずつは違つて、心持もだんだんと別れてゆこうとするものが、なまりや音の揚げ下げまた出し方には多い。たとえ東京などで、「行つてしまふ」ということばを「イッチャウ」と言う人もあれば、ときには皆さんの中にも「イッチャウ」と言う人もある。それしか知らないのではなく、またそうしか言われないのでもなく、時と場合によりこれでもよろしい。またはこの方がおもしろくていいと思つて使つてゐる人も多いのだから、別々のことばとみられるのである。しかしかりにこういうのをあわせて一つに數えるにしても、なお私たちの口で言うことばの數が、比べものにならぬほど多いのである。だれでも自分の思つたことを、文章に書いてみようとするればすぐに氣がつくが、口では言えるが筆ではちよつと書けないということばが、いくらあるかしのれない。つまりふだんの入用が、ひじょうに多い結果なのである。

だから口ことばの第二の特徴としては、その用途の廣大なことをあげてよい。人は全体に文語すな

わち書きことばの恩恵を、それほど多く受けていない。読めば読まれる力を持つてゐる人も、じつさいそう讀んではいない。きょうは新聞も見なかつたということが、主婦などには毎度ある。手紙というものは離れていて会えない人に送るものである。そうして日本人の大部分は、特別な場合は別として、常にこそうたくさんの友だちや身うちを、遠い所には持つていない。ほんの一年に三遍か五遍、それもきわめてありふれた通信を取りかわしているだけである。読めない書けないでは、不自由だといふまでは確かでも、實際の入用は少ない。毎日毎日黙つては暮らされず、それもいたつてたいせつな、お互の幸福にもかゝるほどの、眞劍なつきあいに用いてゐる口のことばとは、そのねうちが比べものにならぬほど違うのである。國語の役目は主としてこの話ことばの方にあるといつてよい。それをいかげんにほつたらかして置いて、たまにしか使わぬ文章のことば、それも一生の間にまた出会うかどうかもしれないようなものばかりに、いっしょうけんめいになつてゐるといふことは考えしてみると少しおかしい。まづたく知らずにもおられぬから、それもできるだけ覚えておこうといふまではよろしい。たゞそつういふものを少し学んだから、もう國語の教育は済んだと思つてゐるような人



が少しでもあつたら、それはたいへんな不幸の種である。そうしてまた今まで何十年の間、この日本のことばをよくしようと思つて、氣をつけて毎日のことばを使つていた昔の人の苦心を、むだにすることにもなるのである。ことばに氣をつけるようにということは学校でも常に教えられる。たゞどういうふうに氣をつけるかということが、まだはつきりとしていないのである。こういうふうにということを、私は少しばかり言つてみようと思ふ。

口ことばの第三の特徴というものは、前の二つよりもっと大きな、複雑なものである。口ことばは毎日の生活に伴なうゆえに、その生活の必要はしぜんに新しいことばを求め、すなわち口語はさかんに生まれ、また古くからあるものをどしどしと取り替へる。代わりができたり、似よつた新しいことばがはいつてくるために、消え滅び使わなくなる單語もなか／＼多い。一言でいうと、口語は変化しやすい。そうしてその変化が全國一度に起るといふようなことはめつたにない。それが今日方言というものの起つてゐる原因であつて、つまりは方言の生じやすいということ、これがまた一つの口ことばの特徴である。

方言は私たちのなかまのように、方々の土地の口ことばを数多く比べてみると、だん／＼にわかってくるものだが、ふつうにはたゞ違つた二箇所の人が出会つて、あることだけができるだけ注意せられ、次にはこれを使う人の数によつて、少数の方が自分のものを捨てようとする。できるだけの人の間に、通用するよつたといふのがもの言う人の願いだからである。つまり口ことばは生活上の必要もないのに、たゞいたずらにふえてゆこうとするものではなかつたのである。人の往來交通が

私たちのな  
かま  
民俗学者の  
なかま。

じゅうぶん自由でないと、同じ一つの民族の間でも、口ことばはだん／＼に方言を生じうるが、これは世の中の進みとともに、しだいに少なくなるものとみてまずまちがいはない。わざ／＼匡正きやうせいなどという運動をするのは、むだなことだつたのみならず、またむりな仕事だつたと私などは考へてゐる。もつとせんな方法は皆さんが國語を知ることだと思ふ。

どうして方言というものができたらうかということ、これはけつして一方の聞きそこない、または覚えそこないではない。そういう失敗はありとすればどこにもあるはずで、一つの地域だけが合同して、その失敗をするといふことはありえない。おもな原因と認むべきものは二つ、その一つは古いものの保存である。甲という土地ではもうその古いものを変へてしまつてゐるのに、乙といふいなかではまだ元のものを変へずにゐる場合である。たとえば「アイラシイ」だの「カワイイ」だのとわれわれの言うことばは、古いところには「メグシ」と言ひ、東北地方だけは今でも「メゴイ、メンコイ」と言つてゐる。こういう例は拾ひ出せばまだ幾つもある。第二には土地によつての変え方の違い、全國一様にもう古いまゝでは使われないが、変へるのにうちあわせをしないから、変へ方が一様でない。「スツ(捨つ)」という動詞は今でも「ステル」と言う土地もあるが、東京とその周囲では「ウツチャル」これはたぶん「うち遣る」であろう。九州の方へ行くと「ウスツル」すなわち「うち捨てる」かと思ふが、それ／＼理由はあつたらしく、一方のみが特に心得違ひとはいへない。ことばがどういふわけでこうつぎ／＼と変わつてゆくのかは、まだ私たちに今はつきりと説明することができないが、根本はおそらくことばを有効に、双物でいふならばよく切れるよつたに鋭利にする必要があつたから



がんばなという草を、葉の形によって、私などの國では「きつねのかみそり」、福井縣の方に行くにあの花の形によって「きつねのたいまつ」ともよんでいる。すずめの何々という名をつけたのも多く、かたばみという草は夜になると、翼を小さくたむるのでこれを「すずめのはかま」と言い、また梅の木などについた刺虫いぢりの巢は、小さな卵の形をして上の方が開いているところから、これを「すずめの酒おけ」だの、「すずめの小便たご」などとさへ言う者がある。こういうのは数えきれないほど日本にはあるが、いずれもたゞ必要という以上に、人をおかしがらせて長く使わせようとする点は、歌やことわざなどもよく似ている。

こういう思いつきはたゞもの名だけでなく、動詞やその代わりになる長い文句にもまた表われている。このごろの人はあんまり使わないが、たとえば「爪つめびきをする」だの「後髪をひかれる」だの、またはごまかすことを「さばをよむ」、「棒先を切る」というの類は、いずれもこれを聞いてすぐには心持がわかり、自分もこんどは使ってみようと思わぬ人はなかったのである。はじめてこういうことばを作り出したのは、たぶんはもの慣れた年寄りか、または遊びの時間を持つ若い人たちで、働さざかりの男女はそんな暇がないから、たゞすなおに他の人の作ったものを、まねていただけかと思われる。子どもでもなければ考え出すまいと思うような、いたって簡単なまたあどけない名が、彼らの遊び相手のかたつむりやおろぎ、その他小さな動物に何百というほどもできている。それをおとなが採用するということもなかったろうが、子どもはすぐにおとなになり、他に名がなければその子どもに作るに作ったものをずっと使つてゆくので、ほどなくそれが一國の國語の部分になってしまうのである。

以前はこういうことば作りが、いなかばかりでなく、都会でもさかんに行われていたのだが、こっちは流行の形が少しづつ変化して、老人や子どもだけに任せておかず、もっと盛りの人の集まって來る遊び場のような所で、はやりだすものが多くなり、しかも多数の人の使わなかった新しいことばだということを知らないために、人の言うとおりをまねてしまったものが多いのである。皆さんは氣がつかないだろうが、二十年、十五年の前と比べて、東京などにも新しいことばがたくさんでき、それとともに古くからのものがどしどしと消えている。大阪おさかでもけつして古くない「えげつない」という変な形容詞が、はいつてきたのも一つの例であり、また「とてもきれいだ」、「とても賢い」などと、感心することに「とても」を使うのも、山登りの人たちが信州から持って來たもののように、やはり二十年そこ／＼の新しい流行であった。新しいことばの中にはでたらめが多く、動機からいっても音の響からいっても、少しも感心しないものが、たゞ流行のために急激にひろまっている。つまりは久しい新語珍重の惰性のようなもので、皆さんがあまりにも心軽く、少しも選択をせず判断を働かさずに、人の言うことをみなまねしようとされた結果であり、あるいは日本人の癖といつてよいかもしれぬが、とにかくもそうなりやすい傾きがあるのも、がんばなは口ことばといふもののまた一つの特徴ではあった。

つまりは口ことばが文語とは違つて、わずかな年月にも変化してゆくものであること、したがつてそれがだん／＼と悪くもなりまたよくもなるものだとすることを、これらの日本語を管理する人たち

に、まずできるだけひろく、氣づかせることが必要なのであった。ことばをよくしたいということは先生方も常に考えておられ、また昔からそれには及ばぬと言った人はだれもないのだが、何がよいことばであるかということについて、まだじゅうぶん研究することができなかったのである。それで人によってはよい暮らしをする家、または都会に住む者の言うことをまねておればそれでよいという類の、おぼろげなひとりの決めをする人が多く、いよ／＼他人の口元にのみ氣を取られ、急いでそのとおりを言おうとするようになった。この点にかけては、昔の人の方が用心ぶかかった。彼らも新しいことばはけっしてきらいではないが、それがはたして自分の今言おうとすることと、びったり合するか否かを確かめるまでは使わなかった。三度でも五度でも經驗を積み重ねて、いよ／＼これでよいと思つてから口にしたので、人に笑われるようなくじりが少なかった。そうしてたゞの口まねを卑しいこととして戒めていたのである。ところが近ごろでは女にもおしゃべりが多くなり、早口、口達者を競うようになったので、急ぐ場合にはつい選択があるそかになり、聞いたばかりの語をすぐに使つてみるという氣の早い人が、毎度おかしなことを言つて笑われるのである。人を笑うということはよくないことだけれども、少し考え／＼ものを言うふうを養うためには、お友だち同志では、ときには批評をしあうのもよいかもしれない。

ことばが豊富になり、したがつてまた下品なものそまつなものが加わつて、やめても少しも困らない、むしろやめた方がよいというものまじつてくるもの、すべてみな口ことばだけの特徴であつて、文語すなわち書きことばの方にはないことであつた。本で書きことばを教えられているかぎりは國語

の悪くなる場合を氣づくことができない。ことに以前は今日と違つて、文語を必要とする人の数は、千人にひとりもあるかなしであつたゆえに、高くとまつて、俗語を寄せつけず、自分たちばかりでただ日本語の美しさを、ほめた／＼といられたものであつた。しかし今日となつてはもうそうしてはいられない。文語の交通は國民の総体に及び、今まであるものだけでは足りなくなつてきた。そこで口・文二つのことばの、境を取り去つてしまおうという運動が起り、現にまた文章や演説の方からは、よほど日常の口ことばに近寄つてこようとしている。しかし、一方の毎日のことばがなにぶんまだ下品でぞんざいで、それをそのまま文字に書いてもすらすら／＼と読めるような文章にはならず、ことに式辭とか講話とかいう類は、もしふだんのとおりしゃべつたら、おかしくてとても聞いておられない。それで文句の終りだけは「である。」や「でございます。」をくっ付けても、本文は変にこち／＼した、中途半ばなものでまにあわせているので、男はそれでもまだがまんができるかしらないが、女は感情が細かいから、このためにかえつて心に思うとおりを、やすらかに言い盡くすことができなくなつて

いるのである。

昔の人のいつた言文一致、口語と文語が接近して、境めがなくなるのはよいことに相違ないが、それはとうてい書く方の人だけの力では成功しない。口ことばの変化が今日のようにでたらめであつては、歌や音樂との調和がとれないのはもちろんのこと、読んで心のさっぱりとするような読みものもできず、それに第一、五十年もたたぬうちに、もう説明がつかぬとわからぬ文句ばかり多くなつて、書いて残しておくかいないのである。若い、心の軽い、よくしゃべる人たちは、これからよつぽど氣をつけなければならぬ。たゞ人がそう言うからというだけで、意味もよくわからぬのに口まねを

Approved by Ministry of Education  
(Date Sept. 28, 1950)

教育文化研究会

國語科編集委員

会長 國立國會図書館館長	金森徳次郎
主幹 東京教育大学教授	石山脩平
東京教育大学附属中学校教諭	長谷川敏正
東京都立白鷺高等学校教授	渡辺茂隆
成蹊大学教授	飛田隆
東京都立西高等学校教諭	鳥山榛名
東京教育大学附属高等学校教諭	和田邦五郎
同	宮崎健三
お茶の水女子大学附属高等学校教諭	稲村テイ
東京都目黒区立第八中学校教諭	大村浜

一、出版権設定登録済  
二、意匠登録出願中  
三、無断轉載を禁ず



昭和二十四年七月十二日 発行  
昭和二十六年一月十五日 三版印刷

〔國語〕中学三年(一)  
定價金二十円五十銭

東京都新宿区市谷砂土原町一三番地  
教育文化研究会  
著者 代表者 金森徳次郎  
東京都新宿区市谷砂土原町一三番地  
教育図書株式会社  
発行者 代表者 小松謙助  
東京都新宿区市谷加賀町一ノ三番地  
大日本印刷株式会社  
印刷者 代表者 佐久間長吉郎

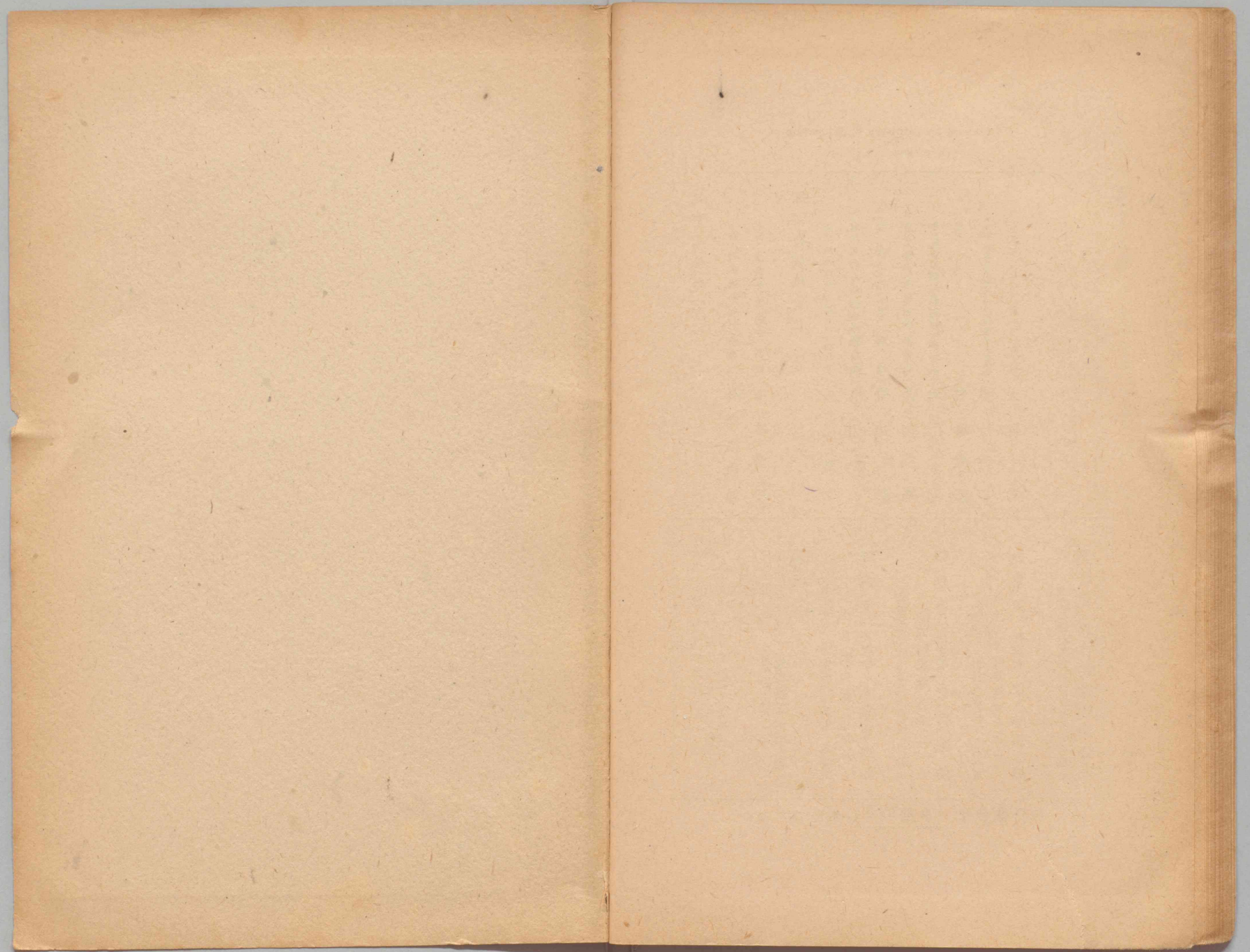
東京都新宿区市谷砂土原町一三番地  
発行所 教育図書株式会社

教科書番号 中國910 昭和26年度用

してはいけない。常から他の者の言うことに注意して、いいことばといやなことばを聞き分ける力を持たなければならぬ。ことに自分でものを言う場合には、せめては作文のとくらひの程度に、どう言うべきかを考えてかゝらなければならぬ。ことばは私たちの選択によるよりほかに將來よくなつてゆく道はないのである。

【学習の手引】

- (1) ふたりの作者の文をまとめて「ことばの楽しみ」とした理由について話しあう。
- (2) 「大きなことば」「小さなことば」とはどういう意味か、短い文で答を書く。
- (3) それ／＼の消息は、おの／＼どういう場合に書かれたものかについて考える。
- (4) かるたのことばの味わいについて話しあう。
- (5) 自分でもかるたのことばを創作して、人に批評してもらう。
- (6) 口語だけにある特別の性質を箇條書にし、要領のよい説明を書き添える。



広島大学図書

0130449690

